

求道

第拾貳卷
第一號

壹月號

■乙卯歲旦所感 「聖德太子と親鸞聖人を憶ふ」

■意外なる信後の變化 「信仰と實際的經營」

■内 愚 外 賢 「たとい牛盜人とはいはるとも」

■「教行信證」信卷講義 願成就釋

「親鸞聖人の求道と佛願の生起本末」

求道第拾貳卷第壹號目次

求道

◎乙卯歲日所感

「聖德太子と親鸞聖人を憶ふ」

講義

◎「教行信證」信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第七席 願成就釋

- 一、聞くといふは
- 二、六句の靈告と二十句の偈
- 三、聖德太子の大乗佛法
- 四、大乗は唯是誓願一佛乘
- 五、聖德太子の御手引き
- 六、加賀奉光寺藏二十句文の眞筆
- 七、聖覺法印と聖人
- 八、唯信鈔選擇本願の御教化
- 九、魚のとれ所の詮察でない
- 〇、四十八願
- 一、第十八願
- 二、一心專念彌陀號の文
- 一三、親の手識の看物
- 一四、五劫思惟
- 一五、不可思議兆載永劫の御苦勞

告白

◎意外なる信後の變化

橘地龜次郎

雜錄

◎内愚外賢

近角常觀

時報

◎求道講話概況

◎昨年中求道學會信仰談話會及慶信會

出席人名

每日曜午前九時

求道學舍

〔本郷區森川町一帯地〕

毎土曜午後二時

第一 求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三 求道會

〔日本橋區葎町説教所〕

求

道

第拾貳卷 第壹號

乙卯歲日所感

○乙卯歲といふは聖德太子が四天王寺の本願緣起を書かれたる歲である、而して今年恰も同干支に周り遇ひたることなれば、之を因縁として聖德太子と親鸞聖人に對する追慕の情を披瀝して見ようと思ふ。

○現今天王寺の寶庫に入りて寶物を縦覽せらるゝ人は注意せらるれば、此乙卯歲につきて珍らしき事實を發見せらるゝてあらう、夫は、後醍醐天皇が嘗て天王寺へ行幸されましたるとき、たしか卯の歳の正月八日であつたため非常に龍顏麗はしく御満足あらせられ繪言を下したまひたことが書きてあつたことを記憶する、此時は干支ともに合したのではなかつたなれど此の如く御宸慮に協ふた次第である、而して今年は干支とも符合せる歲なれば之を以て我等は一層皇太子を欽仰し奉らねばならぬ。

1 ○但し一言注意して置きたいことは日月星辰を選ぶこと、誤解せられぬことである、今日堂々と新聞紙上に九星を掲げて

世の吉凶禍福を下する迷信に投せんとする世の中なれば、今も干支に意味あること、誤解せぬ様にせねばならぬ、唯同干支たるの因縁を以て皇太子を追慕し奉る迄である、眞宗には御承知の如く、如來法中無有選擇吉日良辰である、故に干支に意味はなけれども年忌月忌に於て報恩の情を表すると同様である。

○私は天王寺寶庫中の後醍醐天皇の繪言に暗示せられて、同様の事實寧ろより以上の信仰的事實を親鸞聖人に於て發見することを得たのである、即ち親鸞聖人が此天王寺の本願緣起に據りて皇太子聖德奉讚を製作したまひたことである、而して其製作の歲が恰も建長七歲乙卯であることである、而して其奥書に此の如く書かれてある。

南无救世觀音大菩薩

哀愍覆護我

南无皇太子勝鬘比丘

願佛常攝受

皇太子佛子勝鬘

拜見奉讚人者
南无阿彌陀佛
可唱可唱

建長七歲乙卯十一月晦日書之

愚禿親鸞八十
三歲

此皇太子佛子勝鬘云の文字が本願緣起奥書の本文にして、後代後醍醐天皇が徹覽になりて満足あらせられた文字である、而して親鸞聖人は之を寫して直に建長七歲乙卯十一月晦日書之と加へられたるを見れば、たしかに同干支たることに於て追慕奉讚せられたるものと見ることは、決して牽強附會ではあるまい、

○此聖德太子の本願緣起及其奥書本文なるものは歴史的に如何なるものたるかは今論じようとは思はぬ、寧ろ此は天王寺建立の信仰的事實として古來の高僧が渴仰されたる如く、我等も現代的に渴仰したいと思ふのである、其所感は後に述べ

界。涅槃經言。如來爲一切。常作慈父母。當知諸衆生。

皆是如來子。世尊大慈悲。爲衆修苦行。如人著鬼魅。狂亂多所爲。

○此文は聖德太子と親鸞聖人の信仰的關係を最も明確に證明せられたるものにして、私は年來渴仰して措かざるものである、必ず此奥書眞筆が何れかに断片として存在するであらうと思ふて、恰も親を求むるが如き感を抱て居るのである、江湖諸君子若し御存知の人あらば垂教あらむことを懇願する次第である。

○此文の初の部分は聖德太子磯長廟囉の文である而して我身救世觀世音已下三骨一廟三尊位までは親鸞聖人の的確なる眞筆が加賀金澤專光寺に藏してある、是は此聖德奉讚の奥書にあらずして、朝圓法眼の畫かれた聖德太子小御影に附屬せる贊文として書かれたるものである、實に親鸞聖人が磯長廟囉の文を親書したまひたる眞筆が存するといふことは聖人の化儀即ち家庭的信仰の淵源が聖德太子に在るといふことを最も明白的確に證明されたる事實である。

○話が移るが、朝圓法眼が聖人の壽像を畫かれたる安靜の御影が同じく建長七歲乙卯である、其事は委しく反古裏に記さ

ることゝして、歴史的に證明せねばならぬことは親鸞聖人が渴仰して作られたる前記の皇太子聖德奉讚が果して聖人の眞作たるや否やといふことである。

○此皇太子聖德奉讚の眞筆の數首断片が泉州貝塚願泉寺に現存して致如上人の極めが附てある其筆跡に於て毫髮も疑を容るべき餘地がない、私は深く確信する次第である、周防赤松師の寺にも其一首が存してある、他にも散在してあるだらう、此等断片の全體は古くより板本としては全部刊行されてある、寫本としては越後高田淨興寺に眞筆と稱して傳はりてある、又伊勢高田派專修寺本山に於ては前記の本と多少異りたる眞蹟一本を藏してある。

○專修寺本の奥書は前に掲げたるだけなるも願船寺眞跡断片の全部板本には前記奥書の次に左の文字が加はりてある。

文松子傳曰

大慈大悲本誓願。愍念衆生如一子。是故方便從西方。誕生片州興正法。我身救世觀世音。定慧契女大勢至。生育我身大悲母。西方教主彌陀尊。爲度末世諸衆生。父母所生血肉身。遺留勝地此廟囉。三骨一廟三尊位。過去七佛法輪所。日域大乘功德地。一度參詣離惡趣。決定往生極樂

れてある、曰く

世に申傳へけるは和讚御所作をなされ御歡悅の御かたちをうつさせられ侍る、畫工は朝圓法眼と云あるひは、うそふき御影とも申ならはし侍るにや、すなはち淨土和讚御奥書御筆に建長六年甲寅十二月日とこれあり、正像末和讚の始には康元二歲丁巳二月九日寅の時御夢の告の讚をしるしあります、然は最初建長六年の冬の比つくりはしめ給しか、安靜の御影御裏書建長七乙卯とあり、そのいはれある事にや、愚禿鈔奥書も同年八月五日かたぐ、御愛悅の御容貌たるへし、又高田の顯智、眞佛聖により相傳の御影像もおなし比なるをや

○此安靜の御影か右聖德奉讚と關係あるや否やは不明なれど同じく建長七歲乙卯たることに於ては符合せることは淨土和讚及正像末和讚よりも著しきは事實である、何れともあれ建長七歲乙卯は御製作多き歲にて尊號眞像銘文も此歳の作である、兎に角、此の如く聖德皇太子と關係多き乙卯歳の聖人愛悅の御影が存在するといふことは實に尊き極みである。

○反古裏の著者顯誓師此御影を拜したりとて大に喜び一身の満足、心中の本懐、嚴師の御慈恩報じつくしがたく存ずると

ころなりと感涙に咽びてある、先年大谷別院御遠忌の砌、特別の恩許を以て親しく咫尺の間に安靜の御影を拜し奉るの深厚の因縁を賜はりしは反古裏の著者の満足本懐を數百年の後と同様にいた、きたるものにして身に餘る光榮を感泣する次第である、今此文を草するに及び當年を回想して髣髴として聖人乙卯歲愛悦の御姿を偲び奉る次第である。

○已上は建長七歲乙卯に於て親鸞聖人か聖德太子を渴仰されたる史的事實を擧げたる次第であるが、親鸞聖人のみならず、當時の他の高僧も聖德太子を追慕し奉りたるものである、鎌倉時代に於て日本佛教の自覺が著しく顯はれ來るにつきて和國の教主聖德皇を渴仰したといふことは寧ろ自然である、而して同じく建長七歲に於て左の事實がある、

○聖德太子勝鬘經義疏を支那に於て亦注釋したる疏鈔といふ本がある、此本は慈覺大師が承和五年入唐して將來せられたるを貞觀十三年に智證大師が跋を書いた本があつた、之を鎌倉時代に於ける戒律中興の高僧興正菩薩叡尊がやはり同じく建長七歲に天王寺に發見したといふことがある、而して翌年之を法隆寺に寄入して居るのである、嘗て島田蕃根老人より之を示されたことがある、其卷末に曰く

三韓懷服

四院經營

三寶興隆

○内治平定といふは久しく物部氏蘇我氏二大權臣が相軋して、皇室も其中間に挟まれたまひて聖德太子も其間に生長したまひたのである、十七憲法の一條に人皆有黨亦少違者、是以或不服君父乍違于鄰里と教へたまひしは、確に其經驗があらはれてある、而して四天王寺建立の直接の原因は何人も知るが如く物部守屋を滅亡し給ひし時に四天王を禱り給ひて其平定の後之がため寺塔を起立し物部氏の資財田宅皆寺領となし給ひたのである、而して當時の物部氏のみならず、後世物部氏の如きものを起らざらしめ、朝家安穩、國土豐饒の基を開きたまひたのである、今や我國の内治につきて考ふるにたしかに同黨異伐唯軋爭鬪を事とし、前年は險惡なる風潮勃興し、嚴峻酷烈なる刑名主義を以て、威嚇抑壓を事として、未だ寬嚴宜しきを得て仁政を以て悦服せしむる内治の起らざるは實に聖德太子の洪謨を大正の今日に實現せむことを期せねばならぬのである。

○三韓懷服といふは百濟高麗任那新羅互に相争ひ、反覆常な

謹寄入、勝鬘疏鈔一本

右彼鈔者大唐高僧之製造日域面目之祕書也貞觀十三之運雖請求於我朝建長第七之曆議訪得乎荒陵恨矣忘先哲之芳志可悲失後銳之龜鏡依茲竊寫一本永冀傳通矣 伏惟上宮王聖靈者東隅佛法之曩祖也法隆學問寺者太子鄭重之御願也讒辨因果之人誰忘 皇太子之鴻恩苟志報謝之輩須崇法隆寺之人法聖靈亦留義疏於末代寺家又昌夏冬之研練須寫此鈔安置彼寺仍更修寫一本永以寄入以謝聖靈無窮之恩德以擬寺中琢磨之披覽而已丹襟之旨蓋以若斯

建長八年三月十八日

西大寺衆首苾芻叡尊

之を以て當時の高僧が如何聖德太子を渴仰されしかを知るべきである

○鎌倉時代乙卯歲に於て聖德太子乙卯歲を渴仰したるが如く確に大正時代の乙卯歲に於て再び聖德太子乙卯歲を渴仰せねばならぬことである、抑々聖德太子四天王寺を建設されたる本願緣起の内容は種々の意義を有する次第である、今其著しき點を數ふれば、少くとも左の諸種の意味が含まれてある

内治平定

く有情のありさまことごとく、貪狼の心熾であつた、彼等を攝伏し、歸伏せしめんために、護世四天を作りて西方へ向つて安置せしめられたのである、鎌倉時代に於て元寇ある如く今や世界は大動亂を極め貪狼の心熾んである、此間に處して外交上折伏と攝受とを並用して世界の大平和を實現せしむるは實に我國の使命ではないか、此點に於て殊に聖德太子内剛外柔の外交を渴仰に堪えざる次第である、

○四院經營に至りては何人も知らざることなき聖德太子の物質的精神的の救濟事業である、即施藥院療病院悲田院敬田院の經營である、前三者が肉體救濟であるが第四は根本たる信仰的救濟である、鎌倉時代に於て良觀が慈惠事業を起し光明皇后の瀨病院を再興し、又叡尊が戒律の復興を謀りつゝある時は親鸞聖人が信仰最も起りつゝあるときである、前記の如く同じ建長七年乙卯に於て何れも聖德太子を渴仰しつゝ其方面の異なるが如く、親鸞聖人が東國傳道最盛にして鹿島明神が歸依し、其宮司が弟子となりて順信房となりつゝあるとき叡尊が戒律の復興を鹿島明神に禱りつゝある時である、特に聖德太子の救濟事業は、勝鬘經の理想によりて信仰的精神的を根本としつゝある點は大正の今日最も我等の渴仰して措かざ

る點である。

○三寶興隆に至りては十七憲法の第二條の如く實に四生の終歸、萬國の極宗である、實に古今中外に及ぼすべき世界平和の源泉、萬靈救濟の正法である、特に十方衆生を救ひ罪惡救濟の本意は彌陀の本願に於て其真髓を盡してある、是親鸞聖人が三寶歸依の眞精神は誓願一佛乘にありと皇太子勝鬘經の眞髓を本願圓頓一乘として眞宗開闢したまひたのである、是磯長及六角堂の靈告引導によりて實現されたるものである、そは正像末和讃に於ける聖德太子讚に顯はれてある、曰く佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて正定聚に歸入して、補處の彌勒の如くなり乃至聖德皇のあはれみに、護持養育たへずして如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはしますと、○此の如く内心の經驗としては聖德太子と親鸞聖人の關係は常に認むることを得るも親鸞聖人が事實的に六角堂若くは磯長廟の渴仰若くは三韓懷服憲法制定等の經營を述べられたるは獨り此本願緣起に據りて作られたる聖德奉讚の外はない、故に今其一斑を掲げて兩聖の揆一を渴仰しようと思ふ。

日本國歸命聖德太子

橘のみやこよりしてぞ

奈良のみやこにうつれりし

數大の御てらを造隆し

佛法さかりに弘興せり。

奈良に四帝をへてのちに

長岡にうつりたまひけり

五十年をふるほとに

あたさにみやこうつれりき。

桓武天皇の聖代の

延暦六年にこのみやこ

造興のとき救世觀音

奇瑞靈驗あらたなり。

日本國にはこの御てら

佛法最初のところなり

太子の利益そのうちに

所々に寺塔を建立せり。

太子の勅命歸敬して

六角の御てらを信受す

皇宮の有情もろともに

佛法弘興の恩ふかし

有情救濟の慈悲ひろし

奉讚不退ならしめよ。

四天王寺の四箇の院

造建せんとて山城の

あたきのそまやにいりたまふ

そのとき令旨にあらはせり。

ゆくすゑかならずこのところ

皇都たらむとしめしてぞ

未來の有情れせんとして

六角の壇つきたまひ。

六角の精舎つくりてぞ

閻浮檀金三寸の

救世觀音大菩薩

安置せしめなまひけり。

數十の年歳へたまひて

攝州難波の皇都より

橘のみやこにうつりてぞ

法隆寺をたてたまふ。

恭敬尊重せしむべし。

六宗の教法崇立して

有情の利益たえざりき

つねに五戒をうけしめて

御名をは勝鬘とまうしけり。

往昔に夫人とありしとき

釋迦牟尼如來ねむごろに

勝鬘經をときたまふ

その因縁のゆへなれば。

この經典を講説し

義疏を製記したまひて

佛法興隆のはしめとし

有情利益のもとせり。

佛子勝鬘のたまはく

百濟高麗任那新羅

有情のありさまことごとく

貪狼のこゝろさかりなり。

かれらのくにを攝伏し

躡伏せしめんためにとて
護世四天をつくりてぞ
西方にむかへて安置せる。

* * * * *

儲君のくらのさづけしに

佛法興隆のためにとて

再三固辭せしめたまひしに

天皇これをゆるされず。

太子御とし三十三

なつ四月はしめてそ

憲法製して十七條

御てには書して奏せしむ。

十七の憲章つくりては

皇法の規模としたまへり

朝家安穩の御のりなり

國土豊饒のたからなり。

天喜二年甲午に

忠禪寶塔たてむとて
てつから大地をけつりしに

金銅の函をほりいたす。

はこの蓋の銘にいはく、

今年かのとのみものとしに

かうちのくにいしかはに

しなかのさとに勝地あり。

墓所を點しおほりにき

われ入滅のそのうちに

四百三十餘歳に

この記文は出現せむ。

佛法興隆せしめつ、

有情利益のためにとて

かの衡山よりいして

この日域にいりたまふ。

守屋か邪見を降伏して

佛法の威徳をあらはせり

いまに教法ひろまりて

安養の往生さかりなり。

* * * * *

上宮太子とまうすなり

つのかにわたのへの東の

樓のきしのうへに宮あり

けりその御所にましま

すゆへに上宮太子とまうすなり。

厩屋門の皇子とまうしけり

皇后御まやに御遊あり

けるにそのところにしてむまれ

させましますによりてむまやと

の皇子とまうすなり。

八耳皇子とまうさしむ

八人して一とに奏することを

一度にきこしめすゆへに

八耳皇子とまうすなり。

憲章の第二にのたまはく

三寶にあつく恭敬せよ

四生のついのよりとこ

萬國たすけの棟梁なり。

いづれのよいつれのひとか歸せざらむ

三寶よりまつらすは

いかてかこのよのひとくくの
まかれることをたゝさまし。
とめるものゝうたへは
いしをみつにいろゝかことくなり
ともしきものゝあらそひは
みつをいしにいろにたりけり

此他太子の前生惠思禪師たりしこと、四天王寺建築の様子、
佛教傳來の順序、新羅の日羅百濟の阿佐太子か聖德太子を禮
拜したること、守屋降伏の有様など凡五十首ほどあれと省略
したのである、

○最後に切言せねばならぬことは、かほどの聖德太子の御精
神を實現せんには其經營の根本たる信仰一つである、其信仰
とは聖德太子の御遺言たる世間虚假惟佛是眞といふ一語であ
る、是親鸞聖人の所謂煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、
すべてのこと、みなもて、そらことたはことまことあること
なきに、たゞ念佛のみそまことにておはしますの御教化と符
節を合せたるが如くである、而して此虚假と眞實との關係を
深くいたゝかねばならぬ、虚假不實を飽まで見捨てたまはぬ

御眞實が即佛にてまします、これが念佛である、即念佛成佛
 是眞宗である、我等凡夫は炭の如く如來の眞實は火の如く
 ある、無常の世界は雪の如くである如來の眞實は日光の如く
 である、かくてこそ資生産業即實相といふ人生があらはれ
 てくるのである、邦家の爲國民の御爲念佛すべしの生活があ
 らはれるのである、されば我等は炭である氷であることを忘
 れてはならぬたとひ牛盗人と呼ばれるゝとも我等に適當したる
 名前にして後世者善人佛法者と呼べるゝ價值あるものではな
 いのである、是即聖德太子の眞髓を得たまひし聖人が非僧非
 俗愚禿親鸞と名のりたまひし所以である、

○最後に一言したいことは親鸞聖人後二百年蓮如上人が眞宗
 を再興したまひて晩年大阪本願寺建立したまひたるは聖德太
 子の天王寺未來記に合するものにして且推古天皇御建立の法
 案寺が歸依したといふ不思議なることを附加へたい、聖人が
 往昔の宿縁淺からざる因縁なりと云はれてたのは是である、
 是は反古裏に出である、其建立の明應五年は乙卯の翌年に當
 る次第である、されど是は親鸞聖人の和讃の如き意味は少し
 も認められぬ、却て大阪建立新始が二十八日に當りたるとき
 法案寺の僧行覺が大凶日なれば他の日を撰ばんと申たれば蓮

如上人は如來法中無有選擇吉日良辰といふて直に着手された
 といふことである、之を以て干支星辰に何等の意味なきこと
 は明らかである、然れども歴史は同一の規道を反覆し、信仰の
 盛衰は循環することは明らかである、茲に於てや偶大正の乙
 卯の歲に周り會ふて遙に聖德太子の乙卯歲、親鸞聖人の乙卯
 歲、蓮如上人の乙卯歲を追慕欽仰し奉るのみである、如信上
 人か聖人の大谷廟の東山と同名なりとて奥州東山に住したま
 ひ、古德傳に三春何節哉釋尊唱、滅聖人唱、滅、彼二月中旬五
 日也、此者正月下旬五日也、八旬何歲哉釋尊唱、滅聖人唱、滅、
 彼八旬也此八旬也が如くである。

附記 建長七歲乙卯と聖人自署したまひし、安靜の御影の上下色紙の銘文
 は恰も同年に於て御製作なされし尊號眞像銘文に解釋されてある、而して愚禿
 鈔も亦御滿座の餘、御自管を述べたまひたるものと何ふことが出来る、三經往
 生文類の如きも同年御作である、兎に角、聖人晩年に於ける御滿座の年にして
 且求道入信時代より一生の間關係深き聖德太子との因縁を深められた事は著し
 い、即乙卯歲を因縁として前記皇太子聖德奉讚を初とし其翌年建長八年二月九
 日蓮位房夢想到聖德太子が聖人を禮したまひし靈告あり又其翌年康元二歳の同
 じく二月九日に聖人夢想到正像末卷願の彌陀の本願信すべしの靈告あり、古來
 聖德太子の靈告なりとの説と不明との二説あれど太子夢告の名たる愚禿普信と
 特に著したまふのと正像末和讃は末代時機相應を説きて最後に聖德太子和讃を
 以て結びたまふを以て見れば、たしかに聖德太子靈告なるべしと私は信ずる次
 第である、而して又別に同じく康元二歲丁巳二月廿日聖人作と稱する大日本國
 聖德王聖德太子奉讚一百十四首傳はりてある、是は未だ眞蹟も古板本も見たこ
 とがない、御存知の方ならば幸に示教を待つ。

講義

「教行信證」信卷

(菩提心釋より)

〔夏季求道會講話〕

近角常觀

第七席 願成就釋

一 聞くと言ふは

前席に續きて前々席來の願成就釋である。前々席にも言ふ
 如く、此の願成就は、佛の本願を説き下されたが『信卷』上卷
 の御教化にして、其の本願の親心が彌々成就して、私の心に
 届いて下さる處をお知らせ下さるが此の下卷の成就釋であり
 ます。親が子供の爲めに着物をこしらへて、其こしら
 えた着物が親の意の如く、子供の身に與へられ、子供が満足
 して初めて身に纏ふた時が、初めて親の心が成就した處であ
 る。その如く今此の佛の願成就は、即ち佛の廣大本願が、本
 願の心通り彌々私の心に、聞其名號信心歡喜乃至一念と、
 初めて聞かされた一念の所に貫徹し、有難やと其の御心の受
 けられた立所が、即ち願成就である。而して前席は其の聞の
 言葉についで『涅槃經』の文迄をば拜讀し、聖人の知らせ下

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられまゐらすべし
 と、よき人の仰せをかうふりて、信ずる外に別の仔細なき
 なり。

最早や此のお慈悲ばかりと頂くは、我々危篤の重病人に、夫
 れに與へる一服の薬と渡されて見れば、最早や此の致方無き
 身に、有難や此の一服の薬ばかりとなつた處が一心專念で
 ある、專心專念であると、其處のとこ迄をお話したのであり
 ます。處て今席は猶ほ進んで、其の聞の味ひに就き、古來名
 高きお言葉なる(本文は前號に在り)
 『然るに經に聞と言ふは、衆生佛願の生起本末を聞いて疑心
 有ること無し、是を聞と曰ふなり。』

これは前々席來の姥捨山や、危篤の重病人の話に於ても、既に
 充分親心の味ひはお話した積りであるけれども、既に皆さん
 譬喩や頂き心地の方はよく了解下されたにしても、猶ほ最も
 肝腎なる本願の生起本末の味ひにつき、今一度詳しくお話仕
 度いのである。これは結局、再三お話する法然聖人選擇本願の
 御教化の御眞意をお話する事になるのであります。

二 六句の靈告と二十句の偈

先づ親鸞聖人が法然聖人の教をお聞きなされたは、前席で
 も『口傳鈔』聖光上人の話で申した如く、學問修養の立場から
 てはなくして、十九歳の御時に河内磯長の聖德太子の御廟に
 參詣あらせられた。そして六句の偈の靈告を受けさせられた
 と言ふのである。これは此の時代の思想界の有様を察ると親鸞
 聖人ばかりで無く、融通念佛宗の良忍上人も磯長に參つて居

られ、又明遍僧都なども磯長に行つて居られる。こは平安朝の末より鎌倉時代の初にかけ世の中亂れに亂れて、殆んど安き思ひも無つた。即ち眞實求道の士は、皆な日本佛教の教主なる聖德太子の靈囑に詣うて、誰も彼も眞實安心の道を求められたと見えるのである。て其の如く親鸞聖人も磯長に參つて眞實出離の要法を知らんことを求めなされた。こは大抵御存知の處なるも、猶ほ言ふには其時三日三夜御參籠なされ、して三日目の夜に、

我三尊化塵沙界

日域大乘相應地
汝命根應十餘歲

命終速入清淨土

善信々々眞菩薩

と、此の六句の告げを受けさせられたといふのであります。こは高田の御本山の付實中には、聖人が直筆で此の六句の偈をお書きなされたものありて、私は前年法主臺下より直き拜ませて頂くことを得た。其の御筆蹟は實に著しきものにて、古來聖人の御事蹟につきては種々異説もあるのであるけれど、此の磯長の靈告と、六角堂御參籠につきては、まだ異論のあつた事を聞かぬのである。私は思ひ切つて言ふと聖人一代の御教化は、此の六句の偈がもとになりて出て來たとさへ思ふ程に意味深い靈告であるのである。こは勿論ごく大體を達觀した上から言ふのであります。

そこで先づ「我三尊塵沙界を化す」といふのは、我三尊といふは磯長の靈囑は、知る人は知る三骨一廟の靈囑である。

言ひかけた序に今席は何もかも申しますが、此の磯長には聖德太子の二十句の偈といふのがありて、夫れが囑内の石の壁

紙に之を書いて送られたといふのである。其の事は明に善光寺の傳にも法隆寺の傳にも存して居つて私は前年不思議な因縁で、其事を明にすることを得た。併し之は私の沙汰に亘る故茲には言はぬ事と致します。

三 聖德太子の大乗佛法

さて此の「二十句の偈」に「我身救世觀世音、定慧契女大勢至、生育我身大悲母、西方教主彌陀尊」とあるが、即ち今の六句の靈告に「我三尊塵沙界を化す」とある處なのである。而して次は「日域大乘相應地なり」とは、こは何ふいふ風に言ふ可きであるか、先づ大櫻みに言ふと、聖德太子の御一代は在家の姿を以て佛法を興隆下されたのである。申す迄も無く太子は俗人の位にまします。身に親しく二十五條の袈裟を纏ひ、口に「勝鬘經」「維摩經」を講説し、三寶興隆を以て國家の國本として、「十七憲法」を御制定下され、其の第二章には

篤く三寶を敬せよ。三寶とは佛法僧也。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何の世何の人か是の法に嚮はざらん。人尤も惡なるは鮮し、能く教れば乃ち化す。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉を直さん。

と、即ち斯く日本に於て始めて佛法を興隆下されたのが、我が聖德太子である。處が其の太子の興じて下された佛法は何ういふ佛法であるかと言ふに、出家發心を先きとする佛法ではなくして、自ら太子として世間の位に居り、世間在俗のまま家庭を作りつゝ、此の佛教の信念一つから、攝政の地位に立ちて國政を知召し下され、其の外百般の制度文物皆なこの

に刻まれてあると申すのである。夫れは
大慈大悲本誓願
是故方便從西方
即ち西方淨土より聖德太子と日本に來生して、正しき佛法を興隆下されたと申すのである。

我身救世觀世音

太子が觀音の化身であることは、既に太子在世の時より名高き話であつて、即ち新羅の日羅上人阿佐太子等が然う申したといふのである。此の室のあすこに懸けてある繪は阿佐太子が書いたと法隆寺で傳ふる太子の尊像の寫してあつて、今は、陛下の御物になつてある。

定慧契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主彌陀尊

定慧契女は太子の妃膳部妃を申すのである。即ち膳部妃は勢至菩薩の化身であり、又御母の間人の皇后は西方の教主阿彌陀如來の來現であると申すのである。

眞實眞如本一體

一體現三同身

片域化緣今已盡

還歸西方我淨土

爲度未世諸衆生

父母所生血肉身

遺留勝地此廟墟

三骨一廟三尊位

過去七佛法輪所

大乘相應功德地

一度參詣離惡趣

決定往生極樂界

と、此の二十句の偈であります。こは古來聖德太子の御言葉として言はれて居る處であるも、傳ふる處によると、聖德太子より善光寺の如來に手紙を往復なされた、その三度目の手

信念一つから日本文明の礎を作りて下されたが、聖德太子の佛教であるのである。て此の太子の佛教が即ち大乘佛教である。こは廣く言ふと大乘佛教といふは、斯く眞の信仰の立脚地一つより、世間の總てが皆な顯現し來り、遂に政治、實業、家庭、其他各般の上に、皆な此の佛陀慈愛の光りが表はれ來るのが、實に大乘佛教の味ひであるのである。て斯く太子が日本に現はれて初めて此の意味の、眞の大乘佛教を興隆して下された。その太子の眞の精神を告げさせられたが、「日域大乘相應地なり」とのお言葉なのであります。「諦に聞け我教令す」は、さて其の太子の大乘佛教の精神は、即ち太子が家庭在俗の姿を示しつゝ、我三尊塵沙界を化して下された所以であるが、今其の眞義を告げるから、汝諦に能く之を得よ、との仰せてある。「汝の命根應に十餘歲なるべし」は、汝の生命はもう今後十年餘しか無い。而して十年餘を経て命終れば速に入る清淨土、善信々々眞菩薩と斯ういふお告げなのである。こは眞宗としての大きな問題になつて來たのであるが、こは今回の講話の最後迄聞いて下さると能く分る。幸に段々に言はふと思ひます。兎に角聖人は磯長に於て、斯ういふ靈告を受けさせられたのである。而して之が聖人四十九歳後の求道の大動機となつたのであります。

四 大乘は唯是誓願一佛乘

猶ほ序に一言申しますが、今の二十句の偈文は、既に聖人已前から磯長の靈囑にあつたのである。故に聖人は此の二十句の偈を、何ういふ風に御覽なされたかといふのである。勿

論御覽なされたには違はぬも、夫れに對し信仰上平素何ういふ思召を持つて出でになつたかといふのである。も一つ言ふと、その大乘佛敎の味ひも太子の上では専ら『勝鬘經』『維摩經』によりて説き下されたのであつて、今淨土眞宗で言ふ如き本願念佛の敎へといふことは、太子の上では明になつて居なかつた。夫れが親鸞聖人に至つて、初めて本願念佛の敎へとなりて現はれて來たのである。すると其の太子の仰しやる眞の大乘佛敎の精神は何ういふことであるかといふに、聖人は『行卷』一乘海釋の下に此の事を仰せられて、

一乘海と言ふは、一乘は佛乘なり。大乘は佛乘なり。一乘を得るとは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提とは即ち是れ涅槃界なり。涅槃界とは即ち是れ究竟法身なり。究竟法身を得る者は、則ち一乘を究竟して、如來と異ること無く、法身と異ること無し。如來は即ち法身なり。一乘を究竟する者は即ち是れ無邊不斷なり。大乘は二乘三乘有ること無し。二乘三乘は一乘に入らしめんとす。一乘は即ち第一義乘なり。唯是れ誓願一佛乘なり。

則ち大乘一乘は第一義乘である、唯是れ誓願一佛乘である。南無阿彌陀佛の一つである、此の外に大乘は無」といふ、是が聖人の御願でありませぬ。而して茲て最も注意すべきことは、此の文は「無邊不斷なり」迄は、全く「勝鬘經」の文其儘を引用して出でるのである。「勝鬘經」は言ふ迄もなく、推古帝の御前に於て太子が度び講説なされた處の經である。其の經は印度舍衛國の波斯匿大王の王女勝鬘夫人なる在俗の女姓が、釋尊のみ前に於て告白せられた處の經である。

の建立にして太子の本地如意輪觀世音菩薩をまつりなされた寺である。故に十九の時礙長に於て靈告を受けられた因縁にて、二十九の御時六角堂御參籠の事となつたのである。而して此の參籠の事は覺如上人の『式文』存覺上人の『歎徳文』如き、舊記に存すること故、誰が何と言つても明らかな事柄であります。即ち『式文』には

しかれども色塵聲塵猿猴のこゝろなをいそがはしく、愛論見論癡膠のちもひいよ／＼かたし。斷惑證理愚鈍の身成じがたく、速成覺位末代の機もよびがたし。仍て出離を佛陀にあつらへ、智識を神道にいのる。しかるあひだ宿因多幸にして、本朝佛念の元祖黒谷の聖人に謁したてまつりて、出離の要道を問答す。云云。

又『歎徳文』には
こゝにつら／＼出要をうかゞひて、この思惟をなさく、定水をこらすといへども、識浪しきりに動き、心月を觀ずといへども、毒雲なほほほふ。しかるに一息つかざれば千載ながくゆく。なんぞ浮生の交乘をむさぼりていたづらに假名の修學につかれん。須く勢利をなげすて、直に出離をねがふべしと、しかれども機教相應凡慮あきらめがたく、すなはち近くは根本中堂の本尊に對し、遠くは枝末諸方の靈廟にまうて、解脱の徑路をいのり、眞實の知識をもとむ。ことにあゆみを六角の精舎にはこびて百日の懇念をいたすところに、まのあたり告を五更の孤枕にえて數行の感涙にむせぶあひだ、まはひに黒谷聖人吉水の禪室にいたりて、はじめて彌陀覺法淨土の秘扇にいりたまひしよりこのかた

即ち太子が此の『勝鬘經』を 推古帝の御前に三日間講説せられたといふは、私かに思ふに、推古帝は女帝にてまします、其の上勝鬘夫人なる王女の御經である邊からであらうと伺はれるのである。猶ほ太子が如何に此の經を尊信せられたかといふことは、太子の御經營なされた御事蹟が、一々此の『勝鬘經』の中に説いてある、それは一々鰥寡孤獨を救濟する爲に四天王寺を御建立なされた等の事は、皆な此の『勝鬘經』の中に説かれてある事柄なのである。即ち太子は、時に自ら名のりて佛子勝鬘と仰せられた。夫れ程太子の尊信せられた『勝鬘經』の大乘一乘釋を聖人が『行卷』に其の儘持つて來て、「其の大乘一乘は唯是れ誓願一佛乘である。唯南無阿彌陀佛の一つである」と仰せられたは、即ち茲に餘程の思召があるに違ひ無いと頂かして貰ふ事なのであります。

五 聖德太子の御手引き

而して聖人が斯く仰せられたは、如何にも聖人としては然らざる可き筋合ひにて、即ち聖人は今の太子の靈告により十九歳の時より切實に道を求め、二十九の時迄容易ならざる御苦勞をなされたのである。即ち「汝の命根應に十餘歳なるべし」とのお告げ故、十年たつと死ぬるとのお知らせである。故に死ぬ迄に安心をせなければならぬ／＼と、遂に廿八歳の畢る迄叡山の無動院に在りて、來年になると死ぬる／＼と、一心專念に出離の道をお求めなされたのである。而して終に傳ふる如く六角堂に百日の祈誓を籠めらるるに至つたのである。之も六角堂を何故お選びなされたかといふに、六角堂は太子

云云。

即ち斯く明に六角堂に百日の歩みをお運びなされたことは頂かして貰へるのである。斯く聖人は終始一貫全く太子の御手引きにより、此の道にお入りなされたのである。て聖人は後に『太子讚』にこの事をお喜びあらせられて、

佛智不思議の誓願を、
正定聚に歸入して
補處の彌勒のごとくなり。
聖德皇のめぐみにて
聖德皇のおあはれみに、
護持養育たへずして、
如何にも聖人が、太子により追ひかけられ、引き連れられ、突きやられて、終に信仰にお入りなされたお様子が、聖人御自身のお言葉に見えるのであります。而して此の六角堂に於けるお告げにて、即ち建仁第一の曆春のころ、聖人吉水の法然聖人の禪房に御入室のこととなつたのである。

六 加賀專光寺藏二十句文の眞筆

そこで茲て一寸申して置き度いのは、あすこに懸けてある私の額は、親鸞聖人眞筆の寫眞にて、即ち今いふ二十句の偈を書人自ら御書きなされたものであります。私は此の眞筆を加賀專光寺に於て初めて見せて貰つた時、大に驚いた。前に本山印行の『法林墨華』なる、御歴代の眞筆の寫眞集中に、此の小さき縮寫が出て居たから、夫れから段々調べたら、其の原本が加賀にあつた。故に御願ひして私は原本大の寫眞にとらして貰つて來たのであります。そこで親鸞聖人の御一代を

言ふ上に於て、太子と聖人の關係は誰しも言ふ處であるも、今斯く現に太子の二十句の文の聖人の眞筆がありて、而も聖人は朝圓法眼筆の太子の御影の贊として夫れを御書きになつてあるのである。且つ思ふに、聖人の眞宗が、在家同事の宗風となつたのは、先き言ふ太子の化儀が、直接聖人の上に現はれて來たものである事は、皆な言ふ處であつて、皆さんの方が既によく御存知である。併しその事の、直接聖人自身の御書き物の上にて頂かれる物としては殆んど見當らぬのである。成る程『御傳鈔』の上では、第二段に聖人吉水入室の事があつて、法然聖人が一席の御教化にて佛願の生起本末を聞き開き、御安心なされた事が言ふてあり、而して次の三段に六角堂の救世菩薩が「行者宿報云々」の靈告によりて、在家の有様に従ひ、眞宗の宗風をお聞き下された事が言ふてあるから、皆さんが知つて居るのであるけれども、併し如何にも『御傳鈔』にはあるけれども、聖人自らの御筆として、太子を理想として、此の眞宗在家の宗風をお聞き下された證文といふものは未だ見えなかつたのである。處が今此の一個の書き物は、加賀専光寺所藏朝圓法眼筆太子の畫像に、附屬の贊として聖人の御認めになつたものであるけれども、其の文が實に此の二十句の文なのである。即ち親鸞聖人の淨土眞宗が在家同事の教たる所以、即ち家庭的宗教として深い意義をもち來した次第、而も其の味ひが家庭の上に於て、「我身救世觀世音、定慧契女大勢至、生育我身大悲母、西方教主彌陀尊」の信仰的意義を發揮し來りたる源は、實に太子の化儀を直接お受けなされたものである味ひは、此の一枚の御眞筆の現存にて、

明に伺はれるのであります。而して此の御眞筆には切めの四句が抜け、「我身救世觀世音……西方教主彌陀尊」があつて、又次の四句を飛ばし、「爲末世度諸衆生、父母所生血肉身、遺留勝地此廟囑、三骨一廟三尊位」迄にてとめてある。兎に角かく親子夫妻、互に三を現じて而も同一體なる信仰的意義を示されたる太子の靈囑の文をば、能々太子の贊として斯くお記しなされてあるのである。是れ即ち六句靈告に「我三尊化塵沙界、日域大乘相應地」とある御言葉が、正しく聖人の上に事實に現はれて來た點にて、此の關係よりいふと、此の一枚の書き物は實に意味深いと頂く事でありませぬ。

七 聖覺法印と聖人

さて斯く聖人は、汝命根應に十餘歳なるべし」と告命に接し給ひたのであるから、十年たつと命畢ると、有りとある道を求め、法を修し、戒を致されたのであるけれども、如何にしても安心が出来ぬ。即ち「定水を凝らすと雖浪浪頻りに動き心月を觀すと雖、妄雲なをおほふ。」こんなでは逆も可かぬといふので、六角堂に夜な／＼通ひて百日の懇念を籠められたといふのである。而して其の最後に告を五更の孤枕に得て、幸に黒谷法然聖人の禪室にお出でになつたといふのであります。併し茲は『御傳鈔』には告げがあつたとは書いて無い。唯隱遁のこゝろさしにひかれて、源空聖人の吉水の禪坊に尋まいり給さ。云云。

といふてある。又茲は高田傳によると、聖人六角堂百日の參籠を濟まして、歸り道に四條橋迄お出になると、ハタと聖覺

法印にお出遇ひなされた。聖覺法印が如何にも聖人の惱ましげなる様子を見て、「何を惱んでお出になる」と聞かれたら、「安心の爲め」といふ言葉であつたので、「夫れでは自分も法然聖人の所に參る處であるから、一緒に行かう」といふので、即ち聖人は聖覺法印の手引きによつて黒谷に參られたのであるのである。之は如何にも然らざらうと思ふのであります。夫れは私「教行信證」の組み立て迄が、聖覺法印の『唯信鈔』を讀むと、見えるのである。又『歎異鈔』にしても、外の方の言葉は一つも引いて無い、唯聖覺法印の

たに恐らく相違あるまいと思ふのである。さて以上は聖人が法然聖人にお出遇ひなされた順序を申したのである。夫れは聖人は斯く行き詰りた仕やうなき心で、法然聖人の御教化をお聞きなされたのだといふ事を申したのである。前席言ふ如き鎮西の聖光上人が、彼我が上ならば我弟子となり、我已下ならば彼を弟子とする、といふ如き論議、勝他、名聞、利養の爲めには無くして、眞に出離の問題に行き詰りた仕やうなき思ひで行かれた、と言ふことを申したのであります。

八 『唯信鈔』選擇本願の御教示

處て法然聖人の其の時の御示しが、前々席來の選擇本願の御教化であつたのである。選擇本願の御教化とは、私の常にいふ第十八願の仰せてある。夫れを前々席來は『選擇集』の意味で話した故、今席は其の要點が今の聖覺法印の『唯信鈔』中にある故、夫れ一つ開いて貰はうと思ふのであります。

そも／＼名號をとらぬは、なにのゆへにかかの佛の本願にかなふとはいふぞといふに、そのことのおこりは、阿彌陀如來いまだ佛になりたまはざりしむかし、法藏比丘とまふしき。そのときに佛まし／＼き、世自在王佛とまふしき。

法藏比丘すでに菩提心をあこして、清淨の國土をしめして衆生を利益せんとおぼして、佛のみもとへまいりてまふしたまはく、われすでに菩提心をあこして、清淨の國土をまうけむとおもふ。ねがはくば佛わがためにひろく佛國を莊嚴する、無量の妙行をしへたまへと。そのときに世自在王佛、二百一十億の淨土の人天の善惡、國土の巖妙をこと／＼

彌陀いかにばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべき。の一言文は引いてあるのである。夫れ程尊まる、聖覺法印故、之は屹度法印の手引きによられたに違ひあるまいと思ふのである。又『御傳鈔』信行兩座にしても、信の座に着かれたは、第一に法印大和尚位聖覺とある。又

無明長夜の燈炬なり、 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり、 罪障ももしとなけがされ。

願力無窮にましますば、 罪業深重ももからず、

佛智無邊にましますば、 散亂放逸もすてられず。

の『和讃』にしても、聖覺法印『唯信鈔』の文をお作りなされたのである。殊には法印の『唯信鈔』に、親しく文意を施して、『唯信鈔文意』の御作迄あるのである。斯く聖人は常に聖覺法印を兄弟子と仕てお敬ひなされた。それは其の管で、聖覺法印の信仰は唯信である、唯信するといふ『唯信鈔』を書かれた程なのである。て私は法印の御手引きて法然聖人の許に參られ

くこれをとき、ことごとくこれを現したまひき。法藏比丘これをさし、これをみて、悪をえらびて善をとり、麤をすて、妙をねかふ。たとへば三惡道ある國土はこれをえらびてとらず、三惡道なき世界はこれをねがひてすなはちとる。自餘の願もこれにならずしてこゝろをべし。このゆへに二百一十億の諸佛の淨土の中より、すぐれたることをえらびとりて、極樂世界を建立したまへり。たとへばやなぎのえだにさくらのほなをさかせ、ふたみのうらにきよみがせきをならべたらむがごとし。これをえらぶこと一期の按にあらず、五劫のあひだ思惟したまへり。かくのごとく微妙嚴淨の國土をまうけんと思ひて、かさねて思惟したまはく。國土をまうくることは衆生をみちびかむがためなり。國土たへなりといふとも、衆生むまれかたれば、大悲大願の意趣にかひなむとす。これによりて往生極樂の別因をさだめんとするに、一切の行みなたやすからず。孝養父母をとらむとすれば、不孝のものはむまるべからず。讀誦大乘をもちゐんとすれば、文句をしらざるものはのぞみがたし。布施持戒を因とさためむとすれば、慳貪破戒のともがらはもれなんとす。忍辱精進を業とせむとすれば、瞋恚懈怠のたぐひはすてられぬべし。餘の一切の行はみなまたかくのごとし。これによりて一切の善惡の凡夫、ひとしくむまれ、ともにねかはしめむために、たゞ阿彌陀の三字の名號をとなへんを、往生極樂の別因とせむと、五劫のあひだふかくこのことを思惟しをはりて、まづ第十七に諸佛にわが名字を稱揚せられんといふ願をおこしたまへり。この願ふかくこ

れをこゝろをべし。(中略)つぎに第十八に念佛往生の願をおこして、十念のものをみなみちびかむとのたまへり。まことにつら／＼これをおもふに、この願はなほだ弘深なり。名號はわづかに六字なれば、盤特のともからなりともたもちやすく、これをとなふるに行住坐臥をえらばず、これを行するに時處諸縁をさらはず、在家出家若男若女老少善惡の人をもわかず、なにの人かこれにもれむ。(中略)これ念佛往生とす。

九 魚の取れ所の詮索では無い

そこで聞其名號とは、實に茲に示しの處なのであります。其の名號を稱ふるが何故本願に叶ふかといふに、本願の生起本末が實に斯く／＼の具合で出来上らせた御本願であるからだとであります。處て之が何んでもなきことのやうなれど、中々軽いことと無い。前席前々席は、此の本願の根本の御深意よりも、寧ろ頂く方と言ふたから、今席は一つ之を根本の親心の上から聞いて頂き度い。處て今の御教化に一々ある事柄を之を先づ一々事實と聞くのかといふ疑問が皆さんの上に起つて来るかも知れぬ。全體眞宗の御教化は、勿論皆な事實に違ひ無い、夫れはもとより事實も／＼大事實である。併し其の事實を恰も此世の歴史地理の事實を聞くかのやうに考へて、「法藏菩薩なる人がいつ頃出て来たか」又「二百一十億の淨土は何ういふ風にあるのか」など、此の世の時間的空間的の考へて此の慈悲界の問題に向つて臨まうとするから、初め

から妙な疑心の方が先き立つて、眞に聞く處迄行け無といふ人が、青年の人には往々あるとなるのである。夫れ故茲は聞きやうが願う大切である、我々の詮索だての根性を以て聞くのでは無い。斯く話す私だとして、法藏菩薩が何ういふ所に現はれて来て、何時頃發願せられたか、そんな事はさつぱり分つて居やせぬのである。唯知れる處は聖人の常の言葉なる。

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。云々。

法藏菩薩が長々五劫思惟の御苦勞は、歴史地理上の研究で無い、全く私一人が悪いばかりに、長々の大悲の御苦勞である、茲一つを聞かせて貰ふて居るばかりなのである。之は私共他より思ひがけ無き馳走を與へられて、喰べて旨かつたら此の馳走は何處で何うして出来たかそんな事は調べるには當らぬ。喰べて旨かつたら旨いといふ以上、此の魚は何處で何うして捕れたかといふ詮索は無いのである。唯私に喰べさせ度いばかりに、御骨折り下された御馳走と、夫れ一つを頂かせて貰へば、夫れで最早や足りるのである。其の如く今佛願の生起本末といふことは、魚の取れ所の詮索で無い、唯斯く色々々に料理して私に與へて下さるは、斯く迄私の性分を知召し、其の私に喰べさせんとの廣大の御心といふ、茲一つを頂くが肝腎なのであります。そこで其の廣大の佛願の御心は、既に前々席來お話ししたのであるけれども、今席は今の『唯信鈔』の文が分りよゝい故、これでも一度話さして貰ふと思ふのである。前々席は姥捨山の譬でいふたから、今席は手織りの着物の

話と言はうと思ふのであります。私は餘りいづも此の話を持出すから、監獄などで之を言ひ出すと、囚人が又かとクスク々笑ひ出す。併し私は噓が幾つも無い故、矢張り之を言ふより仕やうが無い。而して其の意味は初席已來已に大分申して居る處であるけれども、抑々本願の生起本末の一番有難い處は何處かといふに、誰が言うても法藏菩薩の如より來生して下された所以のものは、唯此の選擇本願一つを建てんが爲めに御來生下されたのである。即ち早い話が我々米を作る處の百姓の姿形の詮索よりも、其の百姓が辛苦して作り出して呉れた處の米を貰ひ受ける事が肝腎である。其の如く法藏菩薩は本願を建てる爲め態々御來生下されたのなれば、其の作り手の如何よりも現に其方が作り上げて下された米が眼前に差しつけられてあるのだから、其の米さへ頂かして貰へば充分である。けれども其の眼の前の米を頂くは、無明無實に喰べることが能ぢや無い。其の米は百姓が私に喰べさせんと、汗油を絞つた、百姓の苦勞の塊の米なることを頂かねば何んにもならぬのである。之は百姓が私に喰べさせんと汗油の塊の尊い米であることが分つたのが、即ち眞に其の米の有難みが分つて頂いた事になるのであります。

一〇 四十八願

そこで今阿彌陀佛の選擇本願とは何うかといふに、選は「善きを選らび取り」、擇は「惡しきを選らびすつ」といふ意味の文字である。善きを選び取り、惡しきを擇び捨つとは何うかといふに、即ち今の『唯信鈔』の御教化に於て、法藏菩薩が世自

在王佛のみ前に於て、「我すてに菩提心をおこして、清淨の國土を設けんと思ふ。願はくば佛わが爲に、ひろく佛國を莊嚴する、無量の妙行を教えたまへ」と願ひなされた。すると世自在王佛は、二百一十億の淨土の人天の善惡、國土の微妙を、悉く之を説き、悉く之を現して見せしめ給ひた。即ち其中より惡しきは悉く擇び捨て、善きは悉く選り取つて、選擇攝取して下されたが、即ち佛の選擇本願となるのである。その様は「たとへば柳の枝に櫻の花を咲かせ、二見の浦に清見が關を並べたらむが如し」とあつて、菩薩が其の無量の諸佛の淨土を御覽になると、中には三惡道あるの國土もあれば、無い土もある。即ち有るの國土は之を可かぬと擇び捨て、無い世界をば選り取つて下されたが、即ち四十八願の第一に、設ひ我佛を得たらんに、國に地獄餓鬼畜生あらば正覺を取らじ。

とある願になるのである。又折角無くしてもあとで復有るの國土に歸つては何もならぬから、第二願に於て、

設ひ我佛を得たらんに、國中の人天、壽終りて後、復三惡道に更へらば正覺を取らじ

とお誓ひ下された。又其の國土の人天の中に、或は形色不同があり、甲乙が有つては可かぬから、有るを捨て、無きを選り取つて第三願に悉眞金色の願を建て、第四願に無有好醜の願をお立て下された。斯くして段々選擇攝取して、第五願に宿命通、第六願に天眼通、夫れより天耳通、神足通、他心通、光明無量、壽命無量と、終に四十八願をお建て下されたのである。之が皆な一々選擇本願なのであります。

救ひ度いといふ、廣大な佛の理想から割り出された、處の佛のお淨土なのである。而して其の淨土を現實にする爲めに不可思議兆載永劫の御苦勞を経て、其の境界を成就し、私共を其處に行かして下さる教えを作り上げて下されたのが佛の廣大の御眞實故に、即ち私共此の世の迷ひを廻して、其の廣大の佛土に行かれるが、淨土眞宗の教なのである。故に此の佛の恵みの根本即ち佛敎の根本義は、此の人生宇宙世界をば如何に解決するか、哲學的問題ではなくして、今斯く迷ひつゝある御同やうが、直ちに廣大の恵みで悟りの境界に行かれるが實に佛敎本來の面目なのである。之は初席已來度々申して居る通りであります。

一 第十八願

處て過般來いふ第十八願は、斯く結構な御淨土をお作り下されたはよけれども、今の『唯信鈔』の御示しに、「かくのごとく微妙嚴淨の國土を設けんと願じて、重て思惟したまはく。國土を設けることは、衆生を導んが爲めなり。國土たへなりいふとも、衆生生れかたれば、大悲大願の意趣にたかひなんとす。」て、衆生を助ける爲めに御成就下された淨土であるに、衆生が生れて來る道がなくては仕やうが無い。即ち問題は、如何にして生れさせるかになつて來る。即ち何うすれば斯程迄の親心が私に届くかの問題になつて來る。即ち「これによりて往生極樂の別因を定めんとするに云々」であります。て四十八願一々皆な遣る瀧無き親心ならぬはなけれども、彌々其廣大の悟りの境界と我々との間に連絡が着くが、此の十八

處て斯く言ふと聞き慣れてお出での方は、直ぐ淨土の莊嚴の行き渡つた難有い様を思ふて喜びになる。勿論大に結構であるけれども、併しそは眞に信ぜられた人に於ての事で、未だ信ぜられぬ青年諸君にすると、何か神話を聞かされるやうて分り難いてあらうと思ふ。故に若い方の爲めに茲は分りよくお話する必要がある。既に此の前にも話したことであるけれども、これは今の言葉でいふと、此の人生の不完全の様を佛が一々御覽下された様なのであります。それも實に此世の不完全ばかりで無い、我々が此の迷ひの人生を脱して悟りの世界に到る可き教は此世の中にも數あつて、それに皆な夫れ〇〇の諸佛の淨土がある。其の諸佛の淨土の不完全迄も一々皆な指摘して、其の不實不完全に向ひ、一々皆な有らん限りの満足と與へ度いといふ廣大のお心に外ならぬのであります。即ち今日我々が此の人生、及び諸佛の世界に於ける一々の悩み、不完全を一々に皆な知召し下されて、其の不完全不實を一々皆な取り去り、善くしてやり度いといふ廣大のお心が現はれて、茲に四十八願となつたのであるから、之を能く聞いて貰はねばならぬ。又既に頂かれた人が、斯く大悲のお心の籠つた淨土の有様なるを事を聴聞し、如何にも結構なるお淨土である事を喜ばるゝはよけれども、また其處迄行かぬ人は、私は之を唯形容といふてはなけれども、唯徒らに淨土の綺麗なことばかりを喜んで居つても何もならぬ。其お淨土は實に斯く親が一々私の不完全不實を御覽下されて、其の不完全を除き此の善き物と與へて遣り度いと、十方淨土迄を一々御調査下されて夫れを參考となし、飽く迄完全ならしめて其者を

願てつくとするのである。即ち十八願で往生定まるとなるのである。其の絶対の佛境界と迷ひの我々の境界との、連絡の願が此の十八願故、そこで之が一番肝腎となるのであります。て善導大師はのたまはく、

四十八願一々願じて言はく、若我待佛、十方衆生、稱我名號、願生我國、下至十念、若不生者、不取正覺。

と。即ち四十八願、如何にも一々八功德水の水は美はしく漂ひ、迦陵頻伽の鳥の聲迄が、皆な法音宣流の聲であらぬはなけれども、夫れが皆な要するに衆生を救はうと、この廣大のお心の外に無い。七寶樹木の木の葉迄が、一々救はうと、この遣る瀧無き大悲の表はれに外ならぬ故、即ち肝腎の骨目は此の第十八願となるのである。而して其の十八願とは何か、茲が一番大切な處なのであります。既に過日來も一應は申して居る處であるけれども、抑々我々相對有限の者が、絶対無限の佛境界に行かせて貰ふべき釋尊の説き置き下された教に色々あつて、或は智慧、精進、禪定、戒律、乃至孝養父母奉事師長、發菩提心等、皆な夫れ〇〇其の境界に到らせて貰ふ可き道なのである。此の中何れでも眞に最後迄修行する事が出來たら、皆な夫れ〇〇に従つて其の境界に行く事が出来るは、常に申して居る通りであります。處が今佛我々を救はんとし、我々の身の上を御覽下されるに、「一切の行皆なたやすからず、孝養父母を取らんとすれば、不孝の者は生る可らず」――孝は荷も人たるものの皆なせねばならぬ處である。爾るに其のせねばならぬ孝が實際に於て出來ざる我々故に、孝養父母の道を以てしては仕やうが無い。又「讀誦大乘を用ゐんとすれ

ば、文句を知らざるものは望みがたし。布施持戒を因と定めんとすれば、慳貪破戒の輩は洩れなんとす。忍辱精進を業とせむとすれば、瞋恚懈怠のたぐひは捨てられぬべし。除の一切の行は、皆なまたかくの如し。——最後には發菩提心迄が我々の自力雜毒の菩提心であつて迎も仕やうが無いから、どれもこれも皆な擇び捨て、其の如何なる行も及び難い者ば哀はれみ救はんといふ、茲が佛の大願が諸佛に超え優れて有難い處なのである。之は釋尊が、此の世に出てお説き下された處も、釋迦佛の別願としては、三學六度の行を修せよとの外に無い。過去七佛の行化も、要す所「衆惡莫作、諸善奉行」を出てぬのである。すると我々如何なる佛の教えによるも其の如く、實際に善を修し惡を止める事が出来れば事は無いのであるけれども、果して我々其の如く惡が廢めらるゝか何うか。如何程努めても、廢まらぬのである。即ち茲は嚴密に言ふと、我々如何なる教によつて自分の方より信を起さんとするも、夫れは迎も不可能となるのであります。

一一一 一心專念彌陀號の文

話が區々になりますけれども、之を法然聖人の上で言ふても、法然聖人は四十三の御時迄、戒行、修行、有らゆる道を試みられたけれども、終に安心は出来なかつたのである。而して四十三歳の御時、仕舞ひは「一切經」六遍迄も御覽なされなければ、何うしても安心の道は見當ら無つた。處が彌々最後に善導大師の「散善義」の文を御覽になると、

一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥時節の久近を問は

は別物で無い。選擇本願の親心の有り丈けが、即ち親の南無阿彌陀佛なのである。此の南無阿彌陀佛は、之を稱へるから極樂に參らせて貰へる南無阿彌陀佛では無くして、之を以て一切の五逆女人を救ふと、親が態々御成就下された親のまこと南無阿彌陀佛なのである。之が即ち本願の生起本末なのである。て親鸞聖人は法然上人一席の御教化に於て、之をお聞きなされたから

親鸞におきては(唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人のおほせをかうふりて、信ずる外に別の仔細なきなり。

念佛以外にまだ他のものも役に立つのなら、唯念佛してとは仰しやらぬ。聖人は廿九の時六角堂の救世菩薩の御導きて、初めて之を耳になされたのである。十九より廿九迄有らゆる戒律、禪定をなされたのであるけれども、何うしても夫れは安心の道がつかなかつた。彌々廿九命終の期も近づいたとなつて求めに求め、終に

建仁第一の曆春のころ上人廿九歳隱遁のころさしにひかれて源空聖人の吉水の禪坊に尋まいり給き。是則世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をさはめて、これをのべ給に、たちどころに他方禪生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しまし〜けり。

法然聖人が一席の御教化の下に、御入信となつたのであります。

ず、念々に捨てざる者は是を正定の業と名く。彼の佛の願に願するが故に。

之を御覽になると、「一心に専ら彌陀の名號を念じ」と書いてある。此の「一心に専ら」が實に肝腎なのである。こは前席に申した善導大師の御文にしても

光明寺の和尚は、一心專念と云ひ、又專心專念と云へり。て此の「一心專念彌陀名號」の文に法然聖人も氣附きになると、一方に戒を持ち諸の行法を修しながら一方に念佛して居るのは、一心に専らぢや無い。一心に専らば、戒もせず坐禪もせず、唯念佛ばかり故、一心專念とあるのである。其の一心に専ら彌陀の名號を稱へるをば佛の淨土に參る可き正定の業と名く、何故とならば「彼の佛の願に願するが故に」と書いてあるの故、早速彼の佛の願をあけて見られた處が、戒を捨てとも菩提心を起せとも、乃至造像起塔父母孝養をせよとも仰せられて無い。何うあるかといふに唯

設ひ我佛を得らんに、十方の衆生至心信樂して、我が國に生れんと欲ふて乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らし。と。即ち唯南無阿彌陀佛ばかりとあるだけだつたのである。

て法然聖人は「成る程之であつた。今日迄自分は、戒もせんならぬ、行もせぬならぬ、あれもこれもと惱んで居つたのであるが、成る程法藏因位の昔に於て、我々が戒の出来ざる事、行の出来ざることをば佛かねて知し召し下され、専ら南無阿彌陀佛の一つを以てといふ廣大の本願であつたか」と、そこで法然聖人の選擇本願南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本の御教化となつたのであります。そこで選擇本願と南無阿彌陀佛と

一一三 親の手織りの着物

そこで先きよりいふ喩えとは、茲の意義である。之を唯筋丈け聞いて貰つたのでは可かぬから、喩を以て申さうと思ふのである。夫れは私のいふ言ふ親が小供の爲めに着物を下さるに、着物に色々の種類がある。或は絹物の派手なる縮柄なものあれば、流行を追つた華美なる小供の喜びさうなものあり、色々あるから親は何れでも小供に遣り得るのである。即ち戒をせよとの本願になされてもよいのであれば、觀念をお取りになつてもよいのである。現に諸佛の本願は皆な之なのであつて、諸佛には各佛々に本願があるから、色々の種類の本願がある。然るに今阿彌陀佛が、其の數多き諸佛の中の佛の本願もお選びになら無つたといふは、何も佛に他意あるのでは無い。若し絹物の身輕いのを與へれば、亂暴者の小供故忽に破つて仕まひ、流行の派手なのをやれば、忽にしてよごして仕舞ふ。絹物の手輕いのは忽ち破つて仕舞ふといふは、即ち我々戒の着物を與へれば破は忽ち破つて仕舞ひ、坐禪の着物を與へれば坐禪は見るとよごして仕舞ふ。即ち親は私共が煩悶の泥で忽によごして仕舞ひ、罪咎の刺で一邊に引裂いて仕舞ふ私共の惡るさの性分を御覽下されたものだから、五劫に之を思惟して、あの着物でも間に合はぬ、此の着物でも仕やうが無い。即ち出来合ひの品では一つも間に合ふものはなくなつて仕舞つたのである。こは我々の性分は會無一善と申して、一つとして善い所作とは無い、何れの行を

持つて來ても、はたから碎いてしまふ悪い性分なのである。

て『歎異鈔』の仰せには
何れの行にても生死をはなることあるべからざるを哀み
たまひて、願をおこしたまふ本意ひとへに悪人成佛のため
なれば云々。

即ち親が最後に思ふて下されたるは、もう斯くの如き小供の
性分に合ふ爲めには、親の手織りの着物より仕やうが無い。
故に之を作つて着させて遣らうと、茲が實に味ひの深い處な
のである。即ち南無阿彌陀佛の六字は親の一枚の手織りの着
物である、坐禪戒行の派手なや華奢なものは小供の性質に
駄目なが爲めに之等は皆な擇び捨て、最後に親の一枚の手織
りを着させんものと、この廣大なる親心から五劫の間思惟し
て、終に選び上げて下されたが彌陀の本願南無阿彌陀佛であ
るといふ茲實に盡きぬ味のある處であります。處て斯く親は
手織りを着せやうと、折角思ひ立ちて下されても、其手織りの
着物を作り上げぬことには仕やうが無い。そこで一本々々糸
をより機にかけて織り上げなくてはならぬ。即ち佛は南無阿
彌陀佛で救ふといふ唯誓ひ丈けては可かぬから、如何な亂暴
者にも破れぬやう、よごれぬやう一筋々々糸を吟味して實際
に然ういふ手織を織り上げる御苦勞をして下されたのである。
即ち南無阿彌陀佛の一佛名を、佛の十方四無畏、其外有りと
ある萬徳の籠つた南無阿彌陀佛に仕立上げる爲め、佛は不可思
議兆載永劫の御苦勞を仕て下された、となるのであります。

一四 五劫思惟

さて斯く頂くと、五劫の思惟といふことは分つて來た。五

劫思惟は、佛が私共の缺點、悩み、一々の悪しさを既に始め
に於て見て仕まつて下されたが、實に五劫思惟なのである。

茲になると此間からの皆様の告白が有難いのであります。皆
様が人生問題で惱まれる時に「成る程お前が其の苦があるだ
らう、然ういふ點が何もならぬで苦しいであらう」と、また自
分から一言も言はぬ先きに向ふより先き言はれると、「あゝよ
くもそんなに迄自分の悩みを見て、下すつたものだ」と、茲で
向ふ様の親切が初めて分らせて貰へるとなるのである。茲が
即ち五劫思惟なのである。私共が今日現に實際に於て一つも
善くすることが出来ぬ、其の出来ぬことを五劫の昔に佛兼ね
て見抜いて下されて、「如何にも汝は煩惱が起るであら
う、煩惱具足の凡夫だ」とちやんと初めから言うて、下さる
のである。即ち既に初めから十惡五逆の凡夫とあるのである。
之は法然聖人や親鸞聖人の仰しやることには、一言と雖よい
加減の仰せといふものは無い、皆な眞劍の處を言うて、下さ
るのである。即ち五逆十惡と言はるゝは、實際に親殺す悪人
ぢやとのち言葉なのである。夫れを我々は、佛教に於ては悪
いことを五逆十惡といふのだと、皆な平日皆んな並みに横着
にきいて仕まつて居る。夫れ故いざ實際に自分が可かぬとな
ると、今度はこんな五逆十惡の有様では可かぬと、忽ち裏が
來て行き詰つてしまふのである。その然ふなるは、即ち初め
を輕い聞きやうを仕て居るからであります。處が近頃は、「我
々は戒も出来ぬ、禪坐も出来ぬけれど、致方がないからこの
淺ましいままで、やれる丈けやるのだ」と言ふ人がある、そ
んな出来ぬけれどもやるのだからやつて居る様なこと、自分

は破を守り禪をやつて居ると言はれやうか何うかといふので
ある。處が大抵の人は皆な茲で中位に止つて居る。それは遣
る丈けやる道で安心がつくのなら大によい。併し其の道では
八宗兼學の法然聖人さへ安心が出来なかつたのである。故に
茲は眞面目な立場から言ふ時は、實際戒、坐禪で安心が得ら
れて居ないなら、戒、坐禪は出来ぬといふことになつて來な
くてはならぬ。夫れが出来ぬけれどもやる丈けやるより仕や
うがないといふ如きよい加減の處でござましておくら可か
ぬのである。之は必ずしも信仰問題に限らず、今日の思想界は
皆之になつて居る。そこになると親鸞聖人如き、一分一厘、
自分は戒が出来、善が行へて立てるといふやうの分子は、卵
の毛の先き程も無いのである。聖人が流罪御赦免の時奏聞の
文に

爾れば已に僧に非ず俗に非ず、是の故に禿の字を以て姓と
爲す。

と仰せられて、自ら愚禿と名乗り給ひたは、自分はそんな善
いことや修養が出来ると言へる如き分際の人ぢや無い、實に
破戒無戒の愚なる一禿であるといふ實際のあなた御告白なの
である。其の禿が何故満足が出来るかといふに、今の法然聖
人の選擇本願の御教化を頂くと、既に五劫の昔に於て

彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切
を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と爲
さず、唯稱名念佛の一行を以て其の本願と爲たまへり。(選
擇集)

破戒無戒五逆十惡の惡人の爲に南無阿彌陀佛の一行をとると

の本願なのである。此の本願をお聞かせに預りたのであるか
ら、聖人に於ては「親鸞に於ては唯念佛して彌陀に助けら
れ參らすべし」と、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細
なきなり。今斯く坐禪、戒行の出来ぬ仕方なき身に、思ひが
けなく之を救はうとの本願を知らされたのであるから、即ち
本願相應である。函蓋相應とは茲の事である。又之が時機相
應とある處なのである。斯く一分一厘、私の善の出来ざる惡
の止まざるどん底迄を佛始めに於て知召し下され、其の者に
やるせなき涙を以て向うて下された親心が、即ちお見捨てな
き本願の仰せなのであります。

一五 不可思議兆載永劫の御苦勞

處て今私がお話する場合にしても、皆様が持つてお出で
になる問題に「一々察しをつけ、成る程これ／＼の苦があるら
うだらう」と、唯然う言ふた丈けて私が立つてしまへは何もな
らぬ。即ち唯五劫の昔に於て私の有様を見て下された丈けて
は可かぬ。折角然う迄言ふて下されたからには、其上何とか
仕て貰はねば困るのである。そこで佛は「成る程汝の惡しき
思ひのやまぬは最もである。汝はこんなに自分のやうに悪い
ことでは、人が呆れて捨て、仕まうだらうとばかり思つて居
て、誰も此の苦しい心中を見て呉れる者は無いと思つて居る
だらうけれども、我は疾くから其處を見て居るのである」と、
他く迄其者に清淨眞實の思ひを以て向うて下さるのである。
之は私共であると、向ふが貪欲の心で向へば、此方も貪欲の心
で向つて行く。向ふが槍を以て向へば、此方も槍を以て向つ

てゆく。爾るに佛は、斯く私が貪欲瞋患愚癡の心で飽く迄佛に逆つてゆくに對し、彌々哀はれみを以て「欲覺瞋覺害覺を起さて欲想瞋想害想を起さず」と、何處迄も眞實を以て向つて下さるのである。即ち此方が捨を以てついでに行けば、佛は夫れを花を以てよけて下され、此方は炎を以て手向つて行くに佛は飽く迄大慈の涙を以て見て下さるのである。斯く茲全く私共と正反體の眞實を以て、飽く迄私共に向うて下さる御苦勞が、即ち不可思議兆載永劫の御苦勞なのであります。て茲を『大經』には

不可思議兆載永劫に於て、菩薩無量の徳行を積植して、欲覺瞋覺害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染患癡無し。三昧常寂にして知慧無礙なり。虚偽諂曲の心有ること無し。和言愛語にして、意を先にして承問す。勇猛精進にして志願倦むこと無し。云々。

即ち私共は人の思ふてもせぬこと迄思つてかゝつて、人を疑ひ隔てるに、佛は其の隔てる私を飽く迄隔てず、其の悪い性分が彌々衰れ不惑であると、増々眞實を以て向つて下さるのである。而して斯くして不可思議兆載永劫の間、其の五惡十惡の悪人に飽く迄善くするの長の佛の御眞實が終に塊り／＼と、十劫正覺の昔に廣大なる佛と現はれ、南無阿彌陀佛の本願を終に實際に御成就下されたのが、即ち本願の生起本未なのである。即ち親が一筋々々何うか小供の爲めになるやう／＼と、とうと糸を吟味して織上げ、猶ほ小供の身體に丁度いゝ具合に合ふやうに自ら縫ひ上げて、さあ着よと與へて

下されたが南無阿彌陀佛の着物なのであります。

サアすると最早や我々に於ては其の親のこしらえて下された手織りの着物を着るばかりである。故に『行卷』には

即是其行と言ふは、即ち選擇本願是なり。とある。之れが頗る味ひふかき言葉にて、即是其行といふは其の親の下さる手織の着物のことである。選擇本願といふは、此亂暴者に着せたや／＼の親心のことなのである。今此の釋に此の手織りの着物が即ち親の涙の塊りぢやとある此の御一言なのである。子供の前に一枚の着物を投げ出して、サア何も言はぬ此の一枚が親の心ぢやぞと言ひ放された味ひなのである。之を聞いた子供はホロリと一滴有難うムりますと言葉の出ぬ中に、はや親の心は届いて下されたのである。之が即ち着物を頂いたのである。親心を頂いたのである。茲の處が「聞くといふは佛願の生起本未を聞き疑心有ること無し、之を聞くといふ」味ひなのであります。「本席は次號に續く。」

（前略）以前は信仰問題を始め、何事も自分の計らひにて、自分の身にて成し遂げらるゝものと確信して、信仰を解決し、尙萬事を意の如く成さしめんと欲して、拾數年間煩悶苦痛致居り候に、昨夏不思議の御引合せにて、計らず御先生の御法話を拜聴させて頂き、爰に初めて拾數年の疑團が解け私如き淺聞敷き者を、如來の親權なればこそ、お見捨てなき親様の御手廻しにて、此難有き御法を信じさせて頂き、悲しいにつけ、嬉しいにつけ、面白いにつけ、苦しいにつけ、皆な悉くアナタお慈悲を蒙りて頂くやうに相成りたる自分の身を思ひ合はせては、尙ほ一層身の仕合せを感謝致居り候。（二三續く）

告

白

意外なる信後の變化

橋地 龜次郎

橋地氏は身豫備陸軍中尉の籍に居らるゝ方である、日露の役軍に役ひて各地に轉戦し、終に奉天の戦にて頭部に貫通銃創を受け、其の儘人事不省に居らるゝこと一週日、既に戦死の數に加えられ火葬に附せらるべき處を、不思議なる哉從卒某氏の厚情によりて九死に一生を得て歸還せられたのである。其後戦地に在りし時の戦友に對する誓約に基き、専ら療養及び戦死者孤兒の慰籍を思ひ立ち、諸種の事業に着手して經營頗る苦心せられたが事意の如くならず、終に不思議の因縁にて昨春三月學會講話の席上にて佛智不思議の奇蹟なることを聞得し、席上泣き伏せられた次第は、既に昨年本誌第幾號の告白にある通りである。今左の一編は、氏自ら爾後の生活上に表はれ来る諸種の考のあまりに變化の不思議なるに驚いて、其の喜びを披瀝せられたものである。従つて讀者は昨年三號の氏の告白と合はせ讀まれんことを希望します。

私は昨年三月廿九日、思ひ懸けなく學會講話の御席にて、不思議の佛智を知らして貰ふて以來、天地が引くりかへつたと言はんか、現はれ来る總ての考が、夫れ迄と全然正反對になつて来る有様は、我ながら唯々不思議と感ずより外無いのである。夫れ迄の私の仕事の遣り方は、先づ自分は斯うするのだといふ一つの理想を立て、現はれ來べき結果にのみ目をつけ、頼みにやつて居つたのであるが、今は此のお慈悲一つ

に満足させて貰ふと、斯くすれば好くなり悪くなるの、結果を顧慮する心配は、何時の間にか念頭を離れて仕舞ひ、日々困難の中からも至極らく／＼と業務を營むことの出来るのは私として殆んど生れかたと思ふ位、まことに有難くてならぬのであります。又夫れ迄は何かにつけ、家内一族使用人のする事が、不足に見えて仕方が無つた。夫れが今は反對にも、如何にも自分如き我儘な者を、よくも怨まず善く仕て呉れることだと、今度は自然の間に感謝の目を以て見ることが出来るやうになり、之迄は些々たることも叱り度くてならなかつたのが、今は不完全の世に完全を求めて居たことが多年の夢なりしことが明に分るやうになり、私の立場としては何人に對しても不足といふものが無くなつて來たのである。之も自分としては思はざる變化の一つであります。

又身體上にする時は、私はこれ迄夜寝る時、一時間位は、明日の仕事如何にすべき、今日の成績は如何など考えて床に入りながらも寝つくことが出来なかつた。それが今は、やるだけの事をやらせて貰うた上は、明日の計らひなどは其の必用がなくなり、頗る無頓着の有様で、直ぐ眠りに入る事が出来るやうになりたのである。又私は頭部に戦傷を受けて居る爲め、時々頭が痛む。夫れが前は、痛みを忍んで無理にも起きて居ぬならぬ氣持ちがし、又設え寝て居つても如何にも氣が濟まぬ思ひがした。こんなではならぬ、もつと奮起せねばならぬと、始終夫れが苦になつてならなかつたのであるが、此の如何にも偉大なる御哀みを知らして貰うてからは、「その汝の如何にも苦しい處を同情する。汝の負傷の爲め受けて居る

昔病は誰も見る者あるまいが、自分ばかりは能く知つて居ると、斯く遣る瀬無き仰せがあり、感ぜられ、仕事中でも痛み出すと、誰憚らず、横臥させて貰ふやうになりたのである。つまり今迄勉めんならぬ、と思ふて居たことが、總て勉める必要がなくなつて來たのである。又夫等の關係か、従前は滋養分と衛養分と肉を取り牛乳を飲み、頻りに身體の太ることを求めたのが、其時には太れずして、今度は不思議にも何等滋養分も取らず美食も食らぬに、反對に二貫目程も體量の増加を見るやうになつて來たのである。之も私としては唯々不思議でならぬのであります。

二

次に私の務業上の方面にては、従前は商用で人と取引する場合に於ても、何うしても内面の苦しさを包み、表面を飾るといふ風があつたのであるが、夫れが此のお恵みを知らしめて貰ふてからは、そいふ事が出来ぬやうになり、又其の必用も無くなつて來た。頗る、露骨に、借金があればあると言はれ、儲かれば儲かると此の點極めて無頓着に、有るが儘を言ふ事が出来るやうになつたのであります。些々たる一例であるけれども、私は昨春來或る土地の買賣の事を人に頼まれて、賣主の許に交渉に参りました。其の時私は意外にも賣主の方より私に五百金を贈るから、今少し高價に買つて呉れとの依頼に接したのである。従前だとすると斯る場合に私は少からずたじろいたかも知れぬのであります。私は此時、「成程然ら言はれると自分とて金は欲しいは欲しいのであるが

もらつたといふ、こは常に最も著しく感じて居る處であります。

猶ほ私は近き前に於て、取引銀行なる某銀行の仕拂停止の災厄に出遇つたのである。夫れは此上なき確實なる銀行と深く信じて居つたのであつたのが、俄に然らういふ非運に陥つたのであつて、彌々私は人生の當てにならざる事と、一面何程自分て確かだと信じて居つても夫れは自分丈の信心であつて何もならぬ、即ち自力の信仰の駄目なることを彌々知らして貰つたのであります。又最近の事であるが私の近くなる材木町の江戸銀行が、或銀行の影響を受けて取付けの噂が初まつた時、或預金者が私の許に相談に來られたのである。其時私は我ながらひどい如何にも慘酷なることを申ししたのである。それは自分の信じて居つた取引銀行さへ既に仕拂停止になつたのであるから、況んや江戸銀行は猶ほ不確實と考へたから、寧ろ取付けて仕まつた方がよからうと、私の方より幾らか煽動した氣味があつたのである。すると二三日仕て居ると同銀行の松本頭取が預金者に安心を興へる爲め、氏の全財産を提供して農工銀行より都合をつけ、仕拂ひに應じるとの廣告が出たので、此時私は非常に疑ひを持つたのであります。それは「株式會社の銀行に對し、頭取が私財の全部を差出すなど、そんな道理がある筈は無い、こはたしかに一種の虚偽の手段である」と、非常に悪しき疑ひを持つたのである。處が後に頭取と親しく會つた時、頭取自身の話により、預金者一同に満足を興へ度い一念から、氏が全財産を提供せられたものなることが明になり、私は氏の如何にも武士的精神に感じ入

併しそれは出来ぬから、それ位ならそれだけを買主の方にまけて上げて欲しい」との事を以て答へたのである。すると先方の方も悔みられた様子で「君が然らういふ人格の人とは知らなんだからであるが、許して呉れ」とのお言葉であつた故、「イヤ私も欲しは腹一杯の者である」と申し、夫れから其の買賣が済むと今度は賣主の方が幾らかを封物にして謝禮の意味で私の許にお出で下された。私も今度はお志を難有くいさぎよくお受けし、猶ほ買主の方にもこれ、頂いたと見てもらつて、心よく頂戴したのであります。併し之もあとで考へると、買主の方に見せに行つた丈けが、彌々自分の潔白を街ふ淺間しき自分であると深く慚入つたのであります。

總てが斯くの如き具合で、私の店の營業状態としては信仰前も後も更に變はつた處は無い。依然として頗る不確實の状態で、一つも思ふやうにはならぬのであります。其の間を唯今迄とは變つて、頗る氣樂に安心して營ませて貰ふことが出来るのである。私の感じにする時は、今迄は砂上に樓閣を築かうと無駄骨折つて苦んで居つたのであるが、今は金は無くとも土臺が確かなもの、上に坐らして貰ふて居る感じがするのである。其の確かな物の上に立つて、強固に遣り直しをさして貰つて居る感じであります。それで始終此のお慈悲を知らして貰ふてから心に往來する思ひは、今迄は久しく花の蕾の中に蔽はれて居つたのが、今度は春が來て、花の開いた心地が仕てならぬのである。今迄は久しく蕾の中で「あゝすれば悪い斯くしては可かぬ」と、何處迄も因はれの狀態であつたのが、今度は花開いてボンと飛び出した自由の身にして

つたのである。つまり如來が我々を思召す一念より様々の御苦勞をなした下され、地位も財寶も投げ出してお救ひ下さるに比較して、松本頭取の精神をそいふ風を感じ、又先生がいつかの話に、木越閣下が自分の部下が助かる爲なら何時でも自分の生命を差出して助け度いと言はれたといふを思ひ出し、頭取の行動が全く夫れに外無いことを感じたのであります。然るに今迄夫れ程立派な精神の方を、自分の懸け引き根性から疑ひの目を以て眺め、悪しき考を抱いた事を深く耻ぢ入つたのであります。て同銀行の或る宴會の席上で私は此事を懺悔したら、松本頭取は私の言を非常に喜ばれて、「自分の心中を眞に知つて呉れたは極地一人である」との喜びを洩されたのである。「此の自分の赤心を極地一人は見えて呉れた。此の一言さへある上は、最早や財産も何も入らぬ」と、泣いて喜ばれたのであります。それで私は氏を信じて、早速率先して同銀行と取引を開始する事にした。すると或方は開始するもよいが、條件付きにしては何うかと言つて呉れる人もあつた。それは何程か銀行から貸して呉る、條件の下にと言ふのであるが、私のは根本が頭取の立派なる精神に動き、意氣に感じての上であれば、此の以上設え、何うならうが、たとへ全部なくならうが更に不足とする處は無いのであると、斷然無條件で預ける事に定め、全財産を委託する事にしたのであります。て他日不幸にして何となるにした處が、私に於ては更に苦情を言ふ處は無いのである。之等につけても『歎異抄』の「たとえ法然上人にすかされ参らせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」の仰せを有難く頂かして

貰ふのであります。

それで従前は左様な考は更に無つたのであるけれども私は此のお慈悲に遇はせて貰ふてからは、一家の事業にしても此の絶対のお恵みからでなければ出来ぬといふ事を、痛切に知らして貰つたのであります。私の感じにする時は、今日一般社會の商業状態なるものは、まるで廣告本位、人真似ばかりになつて居つて、絶対の立場から致して居る者は甚だ少い。併し私のは今後此のお慈悲の上から、何うかして充實的にやらして貰ひ度い、人真似でなくして絶対の佛の觀をなはす信仰の上からして貰ひ度いと思ふのであります。假りに申せば今日の商賣のやり方は、一般に體裁よく廣告文を作り、品質でごまかす行き方になつて居る、又買ふ方の客にしても自然こそく／＼考へる傾きがあつて、言はゞ双方とも僥倖の狙ひ合ひになつて居る。私は何うかして此の僥倖心をさけ度いと思ふのであります。て今迄「大勉強仕り候」と廣告仕て來た事でも、今度は私は嘿つて品質を良くしてゆく事に變つて來た。又今迄は少し大きな客でも來ると、自然ビク／＼頭下げたものであつたが、今度は大小に係はらず、客として一様に區別なく、何處迄も自分は如來の番頭として平等に満足して貰ふやうに、自然に出來得るやうになつて來たのである。又是れ迄私の最も苦心して來た殘兵寄附の問題にしても、今迄は定めて喜んで呉れるだらうと寄附して來たのであるが、今度は喜ばるゝを自當てに仕て居たのが、耻づかしくならぬやうになつて來たのであります。

さて斯く一家の經營にしても之であるから、私は國家の教育にしても軍隊にしても、政治外交何れの部面にしても、此の絶対の信仰でなければ本當の事は出来まいといふ事を熟々感じるやうになつたのであります。此間も目下喧しき青島の問題に就いて考えて見ても、問題は支那に還附するかせぬかあるやうに思はれる。私から見ると、そんな事をかせぬかといふ如き悠長な問題ではあるまい、眞に東洋平和の上から絶対的に其必用あつて占領したものならば、何を遠慮して取る事に愚圖ついで居るかと思はれるのである。それを取らいてもし、取りてもよしといふ如き問題であるならば、これ懸け引きの餘地を存する、國政を玩弄した外交であつて、そんな薄つぺらなことでは宜しくあるまいと思ふのである。又今度の増師問題にしても、私の感じにする時は、眞に増師の必要があつてせなければならぬならば、二個師團と言はず、五個でも十個でも躊躇して貰ひ度くない。大にやつて貰つて宜からうと思ふのである。又入らぬものならば設え一個師團と雖も絶対に止めに仕たら何うか。つまり私にすれば入るなら大にやつて貰ひ度いし、入らぬなら絶対に頭からやめて貰ひ度いのである。夫れを今日の如く一方は少時も猶豫が出來ぬといふに對し、一方は急ぐ必用がないとて大反對をするといふは、爲政家の間に眞實の信仰があつたら、斯うは決してなると考へるのである。

又近時唱導せられて居る歐洲出兵問題に對しては、私は信

仰上絶對的に反對の意見をもつてあります。それは第一私自身が軍人としての經歷、立場からいふても、私共が君國の爲め生命を投げ出すは、何も世界に日本軍の武勇を輝す爲めに戦争をするので無い。實に國家の爲に、已むに已めぬ場合であるから、即ち皆な妻子を捨て、一家を捨て命を投げ出して國難に越くのである。即ちこれ斯うといふ一點私心の話では無くして、實に國の爲め已を得ぬから仕方無しに戦をやるのである。決して勇武を世界に示す爲めや、よい加減な利益の爲めに生命を捨てるのではなくて、捨てぬならぬ絶對の事情であるから、即ち喜んで捨てに行くのである。夫れを今日よい加減の理由の下に陛下の軍人を歐洲出兵など云云するは、根本的に誤つた説であると考へるのであります。それで私の最も願はしき事としては、今の日本の政治上の諸問題の有様を見聞するにつけ、何うか政治とる人は此の如來の絶対の信仰心の上から、政治をやつて貰ひ度いのである。早い話が、諸種の犯罪者の犯罪行爲にした處が、私の考にすれば、何も皆んなが犯罪を仕度くするのでは無からう。爲政の局に當る人が其の考えて社會全般にも慈悲の光が届くやうになれば、犯罪者も屹度少くなるだらうとの事が考えられるのである。然るに今日の有様の如く、社會の弱者や落伍者を救ふといふ事は更に考えられずして、強い者だけが男爵になり、身體の強壯な者だけが、益々位置を昇るとなると、彌々社會状態が變な具合になつて來やうと思はれるのである。斯く如くなるも畢竟社會にも慈悲が無い故茲に至るのであると考えると、少くも政治の局に立つ人は、是非とも此の信仰の人々によつて

やつてほしいのである。故に露骨に私の希望を申せば、今回の衆議院議員選舉等に際しても、國民皆を申し合せ、信仰のある人々を選舉するといふ事になつたら、始めて國民は枕を高くして安堵する事が出來やうと思ふのであります。

それで古からの言葉に「飯_ニ疏食_ニ飲_ニ水_ニ、曲_ニ肱_ニ而枕_ニ之_ニ、樂亦在_ニ其_ニ中_ニ矣。」といふのがある。私は今迄之等の言葉も本の上では見て居つたのであるが、其の妙域は本當には會得されなかつた。夫れがお慈悲を知らして貰うてから、此時に於て初めて分つたやうな感があるのである。又「不義而富且貴、於我如_ニ浮雲_ニ」の語なども、信後始めて其の眞味が了得された心地がするのである。又「大學」の「欲_ニ齊_ニ其_ニ家_ニ者先脩_ニ其_ニ身_ニ」欲_ニ脩_ニ其_ニ身_ニ者、先正_ニ其_ニ心_ニ。欲_ニ正_ニ其_ニ心_ニ者、先誠_ニ其_ニ意_ニ」などの語も、自分の意が誠で無いから家が齋まらぬ譯けは分つて居つたが、今迄は何うしても分らなかつた。處が此のお見捨てなき誠一つを頂くのである事を知らして貰ふと、初めて其の誠になる所以も分り來り、其の間の味ひも多少解つて來た思ひがするのである。又「巧言令色、鮮哉仁」などの語も、今に於て眞に表面にかいつくらふ必用の無い事が分つて來た。斯く一々味ひ來ると、私は何うも漢籍の文字も、或は佛のお慈悲の上から書いたものでないかとさへ思はれてならぬ程にあるのであります。

四

猶ほ最後に一言、私が今度子供を亡くした感想を話させて

貰ひ度いと思ひます。私は十二月十八日に、生後七ヶ月の男
 兒を、不意に彼の世に先立たせた。夫れが三人の實子中、
 私の最も鐘愛措かなかつた小供だつたのであります。て夫れ
 を亡くしたのであるから、私は唯もう淋しくて仕方が無い。
 掌中の玉を取られたと言はんか、其の時の悲しさは、連もく
 話にならぬ程淋しかつたのである。其淋しい中からも私は「如
 何にも汝の其の淋しい有様が可哀相である、我はいかにも汝
 の心中が察せられる、汝の悲しいは實に最である、無理ない」
 との御親切なる御同情の爲めに、いとも難有く、らくらくと
 通らせて貰へたのであります。又常に「火宅無常の世の中で
 ある、人生は當てにならぬ」との事は、此のお慈悲知らして
 貰うてからは始終思ふて居つたのであるけれども、また私は
 眞に之程迄とは氣がついて居なかつた。夫れを此度ひは小供
 の御方便を以て、私の眠りを醒して貰つて、増々お慈悲の難
 有き事を知らして頂いたのである。て今度は家内も私の様子
 を不思議に感じ、「今迄は随分愚癡をいふ人であつたが不思議
 に今度は愚癡が出ぬやうになつた」と驚いて居る位でありま
 す。又其の子供の通夜の晩に或方が御出下されて、其方の御兄
 弟の方がまた鐵道の通じぬ前越後の親不知の險を通りなされ
 た。すると親不知の大きな波がかぶつて來る危ない淋しい所
 に、一軒の茶屋があつて、唯一人の婆さんが番をして居る。
 夫れで其の御兄弟の方が「婆さん、こんな所に一人居て淋し
 く無いか」と聞かれたら、其時婆さんは、「何が淋しくあるも
 のか、自分一人でない佛様と二人づれだもの」と申したとい
 ふ話を聞き、私は其刹那「成る程これであつた。自分は今迄小

供を取られた」と唯徒らに悲しんで居つたが、之は思ひが
 けない大間違ひを仕て居つた。今斯く小供を取られ淋しさに
 堪えぬ、之を哀はれみて大慈の親は頂いて見れば疾うから私
 の側について、下さるのであつた」と氣づかして貰ひ、彌々
 此身を常よりも力強く感じさせて頂いた次第であつたのであ
 る。夫れ迄は常に先生の講話を拜聴し、喜びながらも、何や
 ら佛は遠い處にお出て下さる方のやうにのみ思つて居つたの
 が、俄かの子供の病歿で眞に堪えられない淋しい思ひをさせ
 られ、其たより無き様を哀れませて、佛は疾うから私の近く
 にお出下されたことを明かに知らせて貰ひ、思はず感涙に咽
 んで謝り入つた次第であつたのであります。
 偕て已上を要するに私のお慈悲に入らして貰つて一番驚い
 た事は、私は實際身に知らして貰ふ迄は、お慈悲は矢張り世
 間並みに、未來安心の問題であるとばかり一途に然う思つて
 居つたのである。爾るに夫れが斯く意外にも歴々此世の實際
 問題であつたとは、之が私として最も強く感して貰
 うて居る處であります。

斯く申上げ候へば、美はしきやうには候へども、其の感謝と申す事も忘れ
 勝ちにて、不知不識世間の事柄に心奪はれ、報謝の稱名も忘り勝ち、何と
 いふ不甲斐なき自分で有らうかと思へば、自分で自分の氣の知れぬ此罪業
 深重の私を自みてに被下て居るアナタのお慈悲、何とも御詫びの上上げや
 うも無い、難有いと申すも恐れ多いことに御座候。如斯私の身を省みては
 如來のお慈悲の廣大なることを思ひ、如來のお慈悲の廣大なることを思ふ
 ては、自分の淺聞しきことを思ひ、南無阿彌陀佛々々と、不思議佛恩
 報謝の御名號を稱へさして頂いては、喜んで日暮し致し居り候。(下略)
 一月元旦 吉津 實 三

雜 錄

内 愚 外 賢

たとひ牛盜人とはいはるとももしは善人もし
 は後世者、もしは佛法者とみゆるやうに振舞
 ふへからず

○乙卯の歳聖人八十三歳御満悅の餘、安靜の御壽影を書かし
 められしとき、一方には愚禿鈔を書きて其御自督を傾けられ
 た、實に愚禿鈔は聖人が其中心の自白にてまします、其思召
 は題號下の御悲歎にて伺ふことが出来る。

○開賢者信、顯愚禿心、賢者信、内賢外愚、愚禿心内愚外賢。
 とあるが即御自督の御悲歎である。

○特に深くいたゞき奉ることは、内愚外賢と言ひ放たれたま
 してあるところが實に深く感ずることである、唯信鈔文意に
 於て内懷虚假を釋したまふ文に、この世のひとは無實のこゝ
 ろのみにして淨土をねがふひとは、いつはりへつらひのこゝ
 ろのみなりときこへたり、世をすつるも名のこゝろ、利のこ

ゝろをさきとするゆへなり、しかれば善人にもあらず、賢人
 にもあらず、精進のこゝろもなし、懈怠のこゝろのみにして、
 うちはかなしく、いつはりへつらうこゝろのみつねにして、ま
 ことのこゝろなき身とするべしと言ひ放ちたまつてある。
 ○かく言ひ放ちたるまゝにして、さらに善くすることの出来
 ぬが我等の有様である、而して善くせんと試みんとする心が
 起らぬのである、全くあやまりはつるより仕方がない、しか
 し何んとかせねばならぬといふ心はない、なぜなれば、どこ
 へまでも見抜いて下されて御見捨てない御慈悲である、さ
 ればとて一點之てよいといふ様な心持はない、御悲歎の文に
 可耻可傷矣と仰せらるゝのが是である。
 ○耻づべし傷むべしといふは、我等が煩惱を見捨てたまはぬ
 御慈悲にかかされて、煩惱の水解けて功德の水となる心持で
 ある、悪くてはならぬと堅く結びて益々凍るのではない、氷よ
 り暖を出さんととりきむのではない、氷のまゝてよいと寒風に
 さらすのではない、いかな堅き氷の中心までも飽まで透りて
 下さる日光の力にて、自然に強剛難化の氷もとけて耻づべし
 傷むべしと融けてくるのが、よくもよくも我は内は愚にして
 外は賢なりといふ御悲歎である。

○動もすれば耻づべし傷むべしといふは、是ではならぬと固くなることの様にも思はれる、現に御一代聞書には蓮如上人の御弟子が愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まずとあるをよみて、往生すべきか、すまじきかと互に語りやひけるを、物越にきこしめされて、蓮如上人立出て、申されるには、されば愛欲も名利も煩惱なり、されば機のあつかひをするは難修なりと仰せられ候とある、往生すべきか、すまじきかといふが即難修である、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば喜ぶべきことを喜ばず、いそぎ淨土へまいりたき心のなき煩惱具足の凡夫を特に憐みたまふのである、して見れば毫髪も機のあつかひなくして耻づべし傷むべしと慚愧懺悔の外はない。

○淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虚假不實のわが身に、清淨の心もさらになしとあるが、實に此内愚外賢と打出したる御懺悔である、しかし入信前には淨土眞宗に歸したとあるに、清淨の心もさらになしては矛盾じやないかと思ふたことがあつた、しかるにいたゞきて見れば我等が不眞實不清淨であるを見捨てたまはぬが如來の清淨眞實にて

られたるが如く、兎角名利でもよいか、名利は悪いとかなり安いのである、名利でよいならば可耻可傷でもあるまい、又信卷に引きたまひし涅槃經の御文に、名聞の爲にせず、利養の爲にせず勝他の爲にせずといふ御文があるべきでない、又聖人が法然上人の御前にて、人師戒師停止すべきよし誓言發願はりきとあるを見れば、實に事實の上に於ては、たしかに名利をすてたまへること、實に内賢外愚にてまします。

○かく言へば直に夫ては名利で悪いか名利は止めねばならぬかと安いのである、勿論止められるものなれば止めるもよからう、石は落ちぬ様に仕様とすれども、落ちぬ譯にはゆかぬ、浮ばうとすれど浮ぶことは出来ぬ、其落ちることをあはれみたまふ如來の願力自然の御力なればこそ、重き石が軽々と打上げらるゝのである、されば毫髪も機のあつかひはいらぬのである、否機のあつかひをするは石自身が上らんとし、炭自身火を出さんと欲し、氷自らが融けんと欲する様なものである、其上がらぬものを引上げるが願力である、其炭を火にするが慈悲の火である、氷の心まで飽まで透るが如來の光明である、耻づべし、傷むべしと心底まで融けて仕舞ふより外

はなし。

まします、如來は火也我等は炭也、炭の心底まで御慈悲の火が透りて下さるのである、されど私共自身は徹頭徹尾炭である、火が炭の心底まで透るところで火が燃える、御慈悲の火は我等が不實の心を憐みたまふなれば、御眞實をいたゞけばいたゞくほど我身の不實を懺悔するの外はない。

○氣心を知りたる友人の前には何事も打明けて語り合ひて懺悔する如く、如來の前には心の底まで打明けて懺悔するが悲歎の御文の、誠に知んぬ悲哉愚禿愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入るを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし、傷むべし矣と心を傾けての御自白である、よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりかほは、おほそらことのかたちなり、是非しらず邪正もわかぬこの身に、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり、この言ひ放ちたる御懺悔がありがたい、名利に人師をこのむなりと懺悔された、實に何んとも言へぬ痛酷なる御懺悔である、我等は實に名利の奴である愛欲の塊である。

○兎角蓮如上人の御弟子が往生すべきか、すまじきかと案ぜられたるが如く、兎角名利でもよいか、名利は悪いとかなり安いのである、名利でよいならば可耻可傷でもあるまい、又信卷に引きたまひし涅槃經の御文に、名聞の爲にせず、利養の爲にせず勝他の爲にせずといふ御文があるべきでない、又聖人が法然上人の御前にて、人師戒師停止すべきよし誓言發願はりきとあるを見れば、實に事實の上に於ては、たしかに名利をすてたまへること、實に内賢外愚にてまします。

○かく言へば直に夫ては名利で悪いか名利は止めねばならぬかと安いのである、勿論止められるものなれば止めるもよからう、石は落ちぬ様に仕様とすれども、落ちぬ譯にはゆかぬ、浮ばうとすれど浮ぶことは出来ぬ、其落ちることをあはれみたまふ如來の願力自然の御力なればこそ、重き石が軽々と打上げらるゝのである、されば毫髪も機のあつかひはいらぬのである、否機のあつかひをするは石自身が上らんとし、炭自身火を出さんと欲し、氷自らが融けんと欲する様なものである、其上がらぬものを引上げるが願力である、其炭を火にするが慈悲の火である、氷の心まで飽まで透るが如來の光明である、耻づべし、傷むべしと心底まで融けて仕舞ふより外

○たとい牛盜人といはるとも、もしては善人、もしては後世者、もしては佛法者とみゆるやうに振舞へからずと聖人の仰せられたる、畢竟此内愚外賢の御懺悔よりあらはれたる御思召である、人より牛盜人と呼ぶるゝと儘よ、若しは後世者、善人、佛法者

と標榜する程の價值あるものではない、との御自督より來りたのである、勿論當時隨分黒衣裳無衣を着し、高聲に念佛して、佛法者めかした連中が諸國に横行したといふことが、歴史上にも見える所を見れば、其弊もありたるなれど、本來我等が左程價值あるものではない、寧ろ人より牛盜人と呼ばれるとも我等に適したる名前と申すべきである。

○聖人が愚禿と名のりたまひたのが全く是である、卑謙であるといふて事更に卑下したまひしこと、思ふならば、大なる誤である、御本書に仰せらるゝ如く非僧非俗なりとて中心より破戒無慚の愚禿なりとの御自督の自然の表現である、聖人が我は是教信沙彌の定なりと仰せられたは、此非僧非俗の意味である、教信沙彌と云へば直に貧賤生活とか勞働者とかいふ他の意味を雜へ來りて、却て遁世、隱者、微賤といふこと、思ふならば誤である、教信沙彌といふも聖德太子の化儀も同様である、資生産業即實相といふ聖德太子の御信仰は、あきなひをもし、奉公をもせよ、獲漁をもせよといふのと同様である、是てこそ却て遁世でない、聖人の隱遁は山より市へ出でられたる隱遁である、聖德太子が世間虛假惟佛是真と遺言されたるが如く、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、みな

時 報

日曜講話概況 (聽講甲記)

十一月八日。晴、青島陥落を視する國旗門並に懸へる。例刻開講、不簡善惡と題せらる。先づ横濱某老人の入信の事より説き起し、此老人は多年我身の惡きものといふ消極方面に甘じ居りて、我等の如何にも惡しく誠なき處を飽迄見捨て給はざる御慈悲といふことに容易に氣附かざりし事を述べ、彌陀の木願は我等が信仰を求めて得る能はず、所有方法を以てしても心を安じ得ざる其の點を哀れみて、吾れ一人は飽迄之れを見捨てぬとある廣大難思の御誓にまします。故に如何なる惡もこの木願の妨げとはならず、又反對に自分は善くする、誠に善くと言ひ居るとも、我等の善や、誠は結局相對的のものにして、眞實の善、眞實の誠に非ることほ少しく考慮すれば直ちに明瞭となること、されば木願の前にはかゝる善も要に非ず、又如何なる惡も恐れなく、たゞ此の誠なき私を憐れと思召し下さるゝといふ、御親切一つに腹ふくらせて頂くのみである云云。

十一月十五日。雨。今日は時雨はげしくして、表の雨戸半ば閉されたり。講題は「絕對不二なり。凡て我等には如何なる事物に對しても必ず價值を附せんとする性向あり。我心の善きなげ善しと思ひ、惡しきをば惡しと思ふも亦之れに外ならず。然るに他力不思議の味は此價值すべての奪ひ去らるゝ所に在り。店頭に立ちて、商品の價ぶみをなすは、特に其品を買ひ求めんとするが爲なれど、今大金満家ありて、店頭の商品全部を買ひ取ると云ふが如き場合には、一々の商品の善し惡しは問題とはならざるべし。如來の仰せも之れに同じく我等一人々々を價ぶみし給ふにはあらで、老少善惡悉く、其物の儘にて買ひ取り下さるゝなり。我等は常にさゝやかなる心を以て善し惡しの區別を立て居るも、窮極するところば善きが善きにて安心ならず、惡しきは猶更の事、たゞ仕て見様なき一つとなる。如來の思召しは即ちこの全然仕て見様なき點を御覺して、我等の毫頭價值なきところを買ひ取り下さるゝ御慈悲に在ります。云云。講話後後援會談話あり。港井

もてそらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとの思召である、されば死後も某閉眼せば加茂河にいでて魚にあたふべしと仰せられたのである、恰も教信沙彌が遺言して遺骸を鳥獸に與へたのと同じである。

○最後に聖德太子の乙卯から親聖聖人の乙卯まで六百六十年親聖聖人の乙卯より本年まで六百六十年であるを思ふて、轉兩聖人を追慕し奉ること切なる次第である。

求道日曜學校につきて

前號所報の如く、本年に入りても三日勿々より開始し、爾後毎日曜及ぶ丈の意を用ひて致させて貰ふて居る。兒童數は未だ至つて少數であるが、幸に兒童なるもの、お慈悲につき、意外の邊より豫期以上の了解あることが明了となり。此點同人の深く喜びとして居る處であります。猶ほ日曜學校なるもの、やり方につきても、漸次得る處あるやうであり、木願に於て之れ迄のさゝやかなる経験を披瀝して、今後に於て試みらるゝ諸氏の參考にも願ひ、かゝる経験諸氏の御意見を伺ひ度いと思つたが、木願には其の餘白なくして其運びに至る事を得なかつた。其中に記述して御注意をも乞ひ度いと思つてます。猶ほ當學舎のは、相當の年かさなる少年少女諸君にも満足を得て貰へる方針を進み度い考であるから、幼は五六才より、上は十四五才邊迄の兒童ある家庭の方には、遠慮なく出席せしめられん事を冀望する。時間には毎日曜の午後一時半からであります。

某氏の告白について先生は未來問題と人生問題、親聖聖人と連如上人、退失往生、不退失往生、化土の意義、十九の願並に二十の願、諸佛と彌陀等の題目について懇ろに説き起さる。

十一月二十二日。快晴。求道會報恩講。定期一同二階佛間に參詣し、正信佛和讃五十六億以下六首を拜誦し、歎異抄論讀あり。次で先生は大阪建立の御文及改悔文を拜讀せらる。其「愚老すてに……」の文及改悔文後半を讀まるゝに當りて先生感極まりて暫く語をつぎ給ふ能はず、一同亦相共に歎歎嗚咽す。下席の後更に私記並に歎德文を拜讀せられ、引續き講話にうつり、奉ら祖德を嘆仰し、かれに信仰の要義を懇話し給へり。午時には例年の如く來聽者一同へ小豆粥を供し、後信仰談話會を開く。武田慧宏師先づ感話として、今朝佛前にてさる讀文を誦しつゝ、深く今の身を喜びたること、及數日前師の宅にて報恩講を営まれし昨夜、夢のうちに、あゝ如何にも自分は悪い、それをお見捨てなきことが實に有難いと涙を流して喜ばせて頂きし事ありとて、眞摯にして且極めて尊き談話もあり。先生これに關聯して、先年金澤法龍寺御住職が「あともどりくしてたどらむ、かひなきこと心までひて」の歌を夢中に感得したりし話を述べらる。次いで一青年其母が財布の底まで叩いて恵まれたる情に感動し、遂に入信し得たる始末を告白され一同大に感泣す(前號告白参照)二時散會。

十一月二十九日。晴。寒氣いと烈し。例刻開講。初めに本月二十三日以來靜岡別院報恩講に招せられ、五晝夜間尊き法縁に逢ひたりとて、それに付きいゝの感話を述べらる。講題は「祖傳と教行信證」とありしを「從順と信順」に改めらる。其要旨は前號社説欄に述べられたる所に異ならず、講話後信仰談話會あり二三子の熱心なる質問ありき。

十二月六日。曇後雨。不可思議の信と題せらる。近頃度々申す如く、我々凡ての事物に對してこれにて善し、かれは惡しと價值を附するの傾きがある。これは小供が痛いから泣く、甘いから喜ぶといふこととなく、幼時より教へ込まれた善惡である。しかるにこの考は實に單に主觀的のもので、木統の事實ではな。されど我々常に此考から離れる事が出来ないて、信仰の上にも、惡しくてもよいなどいふ考さへ生ずるのである。この善惡の考は畢竟まがいて、信仰上から言へば、たとへ我が善と思ふことも少しもあてにならぬ。結局我々は何とも仕て見様なき心なのである、皆さんは大抵こゝまでわかぬ。しかしその

仕て見様なきものを助けて下さると云ふ點がわからぬ。こゝになると例の粥の喻である(前號社説參照)。堅き粥の喰へぬ迄は皆さんにもわかる。しかし私ばいつも佛が可愛想ちやと言ふて下さるといふても、それは満足が出来かぬやうである。されど堅き粥が喰へぬ私に對し、そつといふ弱き私の體の様子を見抜きて、それに最も適當するやうに苦心に苦心を重ねてやばらかな粥を作つてくれた親心の深きことを知れば、満足せずには居られなくなる。これが不思議の信である。撰擇集に名號に難易の義、勝劣の義とが上げてある。私はこの勝劣の方に今迄あまり申さぬが、實に此名號は我等の所有煩惱の病を見抜きて、一々其れに適ふやうに作り上げて下されたお強である。私がどのやうに悪くても、それを一々治癒し玉ふ廣大難思の名號である。されど夫故稱へるてはならない。よくも夫程に私一人を遺瀧なく言ふて下さる御親切を頂くのである。歎異抄の第二章は主としてこの受け心地が書いてある。第三章は直ちに御慈悲の有様が示して有る。受け心地から研究するのではない。光つ眞實の親心をさかればならぬ。云云。

十二月十三日。晴。今日の講題は「煩惱菩提體無二なり」。先づ「本願回願一乘は、逆惡す」と信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさうしむの體文を上げて、其意を詳説し、さてたとへば電球に電流の通じて光りを生じ、炭團玉の火に逢うて赤熱を發することく、我等は底の底まで暗黒にして、一點の光なきものなれども、佛の御慈悲を受ければ、忽ちにして全體に光りを生じ、熱を發するに至る。西洋にて舊教の僧侶は新教の僧侶よりも俸給低し、前者は弱身にて、後者は家族を有するが爲なり。我々の心の惡しければ惡しき丈、佛の慈悲一しほに加はりて下され、如何なるものと雖もお見捨てなき廣大難思の悲願なり。是れ煩惱菩提體無二のすがたなりと述べる。

十二月二十日。快晴。寒氣益々烈しく、參詣の途上結氷を見る。永遠の生命」と通し、今日は特に坐談風にはなすべしとして、色々求道者の不審とせらるる簡條を上げ、之れに解答を與へ給へり。曰く人ば皆誠になれぬと苦しみ、思ふやうにならぬと歎く、されど佛は正に我等の如此有様をみそなはして、之れを憐れと仰せ下さるなり。曰く萬事萬端一として當てにならぬところを見捨て給はぬお恵みなり。曰く淨土とは人生の一も類みとならぬをみそなはし、如何にしても之を救はんとの廣大なるお慈悲のあらはれに外ならず。曰く我等の苦しみの大なる丈希望も亦大となるなり。曰く人世を何とかして胡覽化し得べしと思ふ間は

- 上厚三郎 小野正勇 永井眞玄 梶尾謙兒 新保宗吉 塚本浪子 田島とみ子 後藤梅枝 穂坂さよ子 小林しづ
- 坂戸あさ 姉崎そて子 長尾かず 前田らく 東らむ 岡田えつ 家村鯉 家村明 木原なほ 石垣りゆう 奈倉和嘉 長尾收一 須賀法眞 山田一義 中村久一郎 新堀哲岳 柳瀬留治 市石しん 保正角次郎 森山隆介 麻生太七郎 山名龍宣 高仲恵 佐藤正雄 富田定祐 牧野良平 田川まつ 吉野愛子 原田松枝 田頭よし 入澤さくの 佐々木よし子 尼崎たけ 尼崎あい 山岡政 杉浦さく 野津みつえ 後藤たね 渡邊勝三郎 松本薫 清水石松 廣木淨觀 山本文二 佐原武雄 畑俊保 徳峯了豊 植野明 佐々木貫練 生駒淨秀 植野勤 米永喜太郎 小田善太郎 藤順瑛 鷺田芳夫 井口信雄 井口ふぢ 原とま子 杉谷さく 有馬經子 樺島章子 有馬饒子 酒井幸子 澁谷淳藏 柴山静一 本松憲相 荒井平吉 淺野孝之 原基若櫻木滋 福島政雄 佐治祐吉 山崎精華 東條喜一 飯高一郎 川村伴三 中岡幹恵 西村省吾 長島秋水 寺中哲男 荒木静穂 原まさ 片野つゆ 宮本金治郎 山名はなの 福田こと 森口 西村やす 高橋しげ子 中原菊英 前田清治郎 小林昇 高柳ふみ子 三好とめ子 由村里子 原光 原たづ子 田島とみ 並河つゆ 坂倉はま 小澤はる 丸茂猛 小澤一 近角常音 大佛法音 朝原梅一 野田松次郎 佐々木淨鏡 橋本秀邦 磯野重次郎 深萱英次 黒田吉郎 古崎疆 田島太郎 藤原知謙 小林光助 橋本芳雄 服部玄慎 増田知貞 島田繁太郎 金内徳四郎 福

お慈悲に氣附く能はず。……此等のお話ば、取り分ち聽者の心を惹きたるおとしなりき。

十二月二十七日。晴。聽者所用ありて不參せり。

● 昨年中求道學舎信仰談話會出席人名

- 近角常觀 葦原雅亮 藤本廣恵 瀧澤三郎 大崎林吉 室住熊三 山下正人 片野鐵次郎 渡邊源重郎 伊澤道治 岡田伊作雄 和才齊 今井愛之介 原田俊之助 尼崎貞藏 鈴木弘 下川履謙 酒卷たけ 鳴澤寡意 森西洲 白井成允 有田憲太郎 木村啓助 望月政治郎 佐藤浩 遠山利八 小野正康 塚原秀峰 河邊誠一郎 田村政太郎 陣峻隆 湯澤幸吉郎 佐藤幸一郎 近角伊恵子 今井ぬい 黒川よね 中根慶信 安田善彦 生田利雄 生田さくの 宇野はつ 福田田鶴子 藤本光枝 野澤たか 新名たみ 丸茂むね 小出はや子 牧野節 暉島はる 大出久井 鎌田晃 西村清 高島藤作 柴田清作 成相圓藏 増原夫一郎 橋地龜次郎 鎌田靜夫 楡山錦光 中山理丸 矢田淳 田郵政太郎 平光吾一 田中廣志 奥井貞吉 米澤竹三郎 野原鐵次郎 大谷清 盛田達三 小林修次郎 近角さそ子 青木正勝 青木ふで 萩野あい 加藤てる 楡山いと子 武田久美 小原藤枝 高松君子 田中みな 湊とし子 八重子 河井臥龍 佐藤清一郎 隅山廣吉 三井光彌 遠藤誠眞 藤井經雄 奥田秀吉 島津義英 金丸勝五郎 井

- 地茲憲 中富猪熊 加藤庄松 兒玉九十 長納賢明 今井彌五郎 佐藤佐市 井上玄一 平田省三 井口乘海 大井喜久 根尾みつ 杉浦たつ 古市ひさ 萩野伸三郎 小林昌子 小宮はま 井口まさの 武田慧宏 中村久一郎 磯貝清一 小林治橋 池上正澄 篠原知 顯原退藏 渡邊秀吉 田中勝五郎 山口さと 大野さみえ 牧田起世子 西本さだ 大竹菊子 泉八重 島倉ゆり 島倉えん 島倉章松本千代子 石山須磨子 生沼たづ 田中けい 前田つな 關さら 生田さくの 黒田よし 宮澤たか 千田照 坂本さわ 坂本しん 岡田かめ子 森脇忠市 竹鼻尙友 前田利謙 牧田覺三郎 吉留英一 川上律山 大河内貞 工藤來 山本重吉 勝侯啓作 松下要子 藤野君枝 原蓬子 今井せい子 前田はる 水谷まさ 石垣りう 吉原政道 松崎壽三 野吹秀太郎 林龍三郎 佐治由吉 野邊地慶三 内堀末松 金子忠 島浦ゆり子 植野文之 川瀬いさ 尾仁邊あけ 形堀映岳 日下賢順 松本省六 米澤てう 齊藤遊雲 古市とみよ 清水乙巳 佐々木秀之枝 玉置齊次 西本さえ 高橋鈴 小島高吉 達田智 厚東清一 野澤樞 浦井こう

● 昨年中慶信會出席人名

- 近角常觀 長尾收一 西村富三郎 井口圓證 大崎林吉 瀧澤三郎 葵見丸 室住熊三 楡山錦光 楡山いと子 丸茂むね子 井上敬 井上澄江 藤本光枝 武田久美 井口

ふぢ 新名たみ 渡邊源重郎 山下正人 伊澤道治 小澤
 一 小野正康 片野鐵次郎 宇野はつ 岡部たみ子 樺島
 章子 後藤たね 竹内徳子 野澤たか 野澤みつえ 高橋
 しげ 今井せい 田村政太郎 匹田しを 匹田直 桂重鴻
 東虎次郎 米澤竹三郎 小出はや 松島なみ 小林よね
 生田利雄 鈴木かね 小林治橋 葦原雅亮 今井愛之助
 森澤二郎 山田徳次郎 原田俊之助 大平てつ子 近角き
 そ子 近角伊恵子 原蓬子 吉野愛子 今井彌五郎 今井
 喜美 遠山利八 山内倉六 塚原秀峰 中根慶信 佐々木
 貫練 岡田伊佐雄 木村啓助 牧野良平 萩野愛子 富田
 久介 東野貞雄 梅本朝衛 森山隆介 松村肅 橋富子
 岡仲子 島津義英 須賀法真 橋地龜次郎 隅山廣吉 西
 村清 五味慶重 和才齊 武田慧宏 島田繁太郎 生田さ
 くの 平野善之助 丸茂猛 野原鐵次郎 竹鼻尚友 井口
 まさの 清水かつ 福島久子 奥野あき子 牧野せつ子
 築紫八重 島田淑子 村岡願子 松崎淑 豊岡雛子 長尾
 かず子 片野つゝい 指田嘉吉 大竹信吾 福間甲松 宮澤
 磯吉 小宮はな 森さかえ 丸茂ふみ子 山名花野 佐々
 木よし子 大佛とく子 家村鋤 家村明子 伊藤いと 湊
 とし子 小林しづ 増田八重 大出道子 大出久井 澁谷
 淳藏 柴山清一 中村久一郎 松川元次郎 高木惣九郎
 佐々木岩吉 廣木淨観 奈倉和嘉 尼崎あゐ子 藤野君枝
 松本千代子 渡邊操 長谷川わか 清水はつ 梶川はな
 岡田みつ 加藤てる 坂戸龍子 本澤よね 東らむ 岡田
 えつ 田中みな 松下要子 高松君子 前田はる 新谷清

潔 近角常音 尼崎貞藏 光田幸次郎 荒井平吉 白井成
 允 根尾謙光 田中賑吉 佐々木真徹 渡邊俊一 志村虎
 雄 館績 富田胖 遠藤誠真 江頭六郎 柳瀬留治 倉川
 篤山 奥田秀吉 橋本芳雄 中山理丸 山本重吉 福島政
 雄 室井まさ 岡田龜子 小林信子 涌井から 清水みつ
 の 爲岡饒子 野津りう 福田まさ 根岸しげ 坂倉はま
 小林昌 田島とみ 後藤梅枝 尼崎たけ 濱野いちの 原
 田松枝 原みつ 成瀬あさ 成瀬榮 別府かず子 萩野あ
 い子 松本いし子 松本ひさ 松本彦次郎 福地茲憲 内
 堀末松 植野勤 宮本金次郎 増子賢慧 池上正澄 儀我
 保太郎 藤原司作 篠原知 相ノ田彌平 保正角次郎 下
 川履信 工藤來 深萱英次 川上律山 合志覺照 飯高一
 郎 小林光助 山崎精華 田島太郎 磯貝清一 高仲恵
 高仲彌二郎 齋藤遊雲 森脇忠市 杉野芳太郎 橋本秀邦
 島倉ゆう 齊藤ふみ 姉崎そで 原田松枝 堀つゝい 有馬
 饒子 春田さん 杉野かね 内田銀次郎 高木一郎 深澤
 友與 高島藤作 佐藤兵太郎 浮川彌太郎 小宮はま子
 瀧原みつ 荒木静穂 市石六郎 森西洲 森口やすえ 高
 橋はま 今田しん子 田中一雄 渡邊研六 玉川吉太郎
 末内忠太郎 奥田秀法 福井教證 降旗文世 諏訪啓哉



毎月一回
十日發行

六條學報

一部郵税共拾錢
壹ヶ年分壹圓

第五百九十九號 (一月一號) 要目

附録	時評	篇	欄	本
「デイギアヴダーナ」の研究並に翻譯	宗教の生命を論ず	運命と認識	思索か實行か	「福音書」に於ける佛教的影響
神亮三郎	西光義遠	源衣山	奇山人	羽溪了諦
				宇野圓空
				原波坊
				鷲尾教導
				龜谷聖馨
				楠基道
				森川智徳
				野々木梅所
				脇谷移謙
				梅原真隆
				足利宣正
				清原秀惠
				未定
				承應の宗論
				我國儒者の佛教觀
				山姥 (下)
				新實在論者の認識論其物に對する見解
				支那人觀
				理想宗教と實行的宗教
				二十四輩順拜の起源と沿革
				絶對なる親子の親
				希臘古代より現代に到る宗教と科學

發行所 東京 佛都 京都 大阪 西條 六條 壬寅會 振替 八口 座四 大七 阪番 發賣所 東京 佛都 京都 大阪 西條 六條 法林館 森江書店

前號要目

求道

◎從順と信順

講話

◎『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角 常觀

第六席 願成就釋

一、一念多念證文に曰く、二、能の言は他力を表はす 三、其佛本願力 四、開不具足 五、聖光上人法然聖人に面謁の時のこと 六、聖人が求道の態度 七、法師には三つの誓あり 八、名聞、利養、勝他 九、唯念佛と雜行雜修 一〇 親縁聖人の頂かれたは 一一、一心専念専心専念

告白

◎ほとけ様御一人きり

小澤 はる

◎財布の底迄叩いて下さるお恵み

渡邊 秀吉

講義

◎歎異鈔

近角 常觀

第十三章(承前)

雜錄

◎唯觀念佛衆生攝取不捨

時報

◎求道講話概況